

Oracle® Fusion Cloud EPM

移行の管理



F28934-21



Oracle Fusion Cloud EPM 移行の管理、

F28934-21

Copyright © 2015, 2025, Oracle and/or its affiliates.

著者: EPM Information Development Team

This software and related documentation are provided under a license agreement containing restrictions on use and disclosure and are protected by intellectual property laws. Except as expressly permitted in your license agreement or allowed by law, you may not use, copy, reproduce, translate, broadcast, modify, license, transmit, distribute, exhibit, perform, publish, or display any part, in any form, or by any means. Reverse engineering, disassembly, or decompilation of this software, unless required by law for interoperability, is prohibited.

The information contained herein is subject to change without notice and is not warranted to be error-free. If you find any errors, please report them to us in writing.

If this is software, software documentation, data (as defined in the Federal Acquisition Regulation), or related documentation that is delivered to the U.S. Government or anyone licensing it on behalf of the U.S. Government, then the following notice is applicable:

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs (including any operating system, integrated software, any programs embedded, installed, or activated on delivered hardware, and modifications of such programs) and Oracle computer documentation or other Oracle data delivered to or accessed by U.S. Government end users are "commercial computer software," "commercial computer software documentation," or "limited rights data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, reproduction, duplication, release, display, disclosure, modification, preparation of derivative works, and/or adaptation of i) Oracle programs (including any operating system, integrated software, any programs embedded, installed, or activated on delivered hardware, and modifications of such programs), ii) Oracle computer documentation and/or iii) other Oracle data, is subject to the rights and limitations specified in the license contained in the applicable contract. The terms governing the U.S. Government's use of Oracle cloud services are defined by the applicable contract for such services. No other rights are granted to the U.S. Government.

This software or hardware is developed for general use in a variety of information management applications. It is not developed or intended for use in any inherently dangerous applications, including applications that may create a risk of personal injury. If you use this software or hardware in dangerous applications, then you shall be responsible to take all appropriate fail-safe, backup, redundancy, and other measures to ensure its safe use. Oracle Corporation and its affiliates disclaim any liability for any damages caused by use of this software or hardware in dangerous applications.

Oracle®, Java, MySQL, and NetSuite are registered trademarks of Oracle and/or its affiliates. Other names may be trademarks of their respective owners.

Intel and Intel Inside are trademarks or registered trademarks of Intel Corporation. All SPARC trademarks are used under license and are trademarks or registered trademarks of SPARC International, Inc. AMD, Epyc, and the AMD logo are trademarks or registered trademarks of Advanced Micro Devices. UNIX is a registered trademark of The Open Group.

This software or hardware and documentation may provide access to or information about content, products, and services from third parties. Oracle Corporation and its affiliates are not responsible for and expressly disclaim all warranties of any kind with respect to third-party content, products, and services unless otherwise set forth in an applicable agreement between you and Oracle. Oracle Corporation and its affiliates will not be responsible for any loss, costs, or damages incurred due to your access to or use of third-party content, products, or services, except as set forth in an applicable agreement between you and Oracle.

目次

ドキュメントのアクセシビリティについて

ドキュメントのフィードバック

1 移行の使用

このガイドについて	1-1
ライフサイクル管理用の移行へのアクセス	1-2
スナップショットについて	1-2
アーティファクトとアプリケーションのバックアップ	1-4
アプリケーションのバックアップ	1-4
アーティファクトのエクスポート	1-6
サービスへのアーカイブのアップロード	1-7
環境からのファイルおよびスナップショットのダウンロード	1-8
スナップショットとアーカイブの削除	1-9
エクスポート操作の繰返し	1-9
スナップショットとアーカイブの名前変更	1-10
インポート・オプションの設定	1-10
スナップショットからのアーティファクトとアプリケーションのインポート	1-11

2 レポートの生成

移行ステータス・レポートの生成	2-1
アーティファクト 変更履歴の表示	2-2
アーティファクト 更新レポートの生成	2-2

3 Cloud EPM 環境のクローニング

環境のクローニング前に実行するタスク	3-2
クローニング時の Essbase バージョンの処理	3-2
環境をクローニングするためのステップ	3-3

4 オンプレミス・アプリケーションの Cloud EPM への移行

前提条件とノート	4-1
一般的な前提条件	4-2
デフォルト・アプリケーション・プロパティ	4-2
必要な役割	4-2
サポートされていないアーティファクト	4-2
サポートされていないモジュールおよびアプリケーション	4-3
予約語	4-3
プロセス・フロー	4-3
ステップ 1: セキュリティ・モデルの移行	4-4
オンプレミス・ユーザーおよびグループの識別	4-4
セキュリティ・アップロード・ファイルの作成	4-6
サービスへのファイルのアップロード	4-9
Cloud EPM でのステップ	4-10
アイデンティティ・ドメインでのユーザーの作成	4-10
事前定義役割へのユーザーの割当て	4-11
アクセス制御へのグループのインポート	4-11
ステップ 2: オンプレミス・デプロイメントから Cloud EPM へのアーティファクトの移行	4-12
Planning から Planning への移行	4-12
サポートされている移行パス	4-13
Planning アーティファクトのエクスポート	4-13
エクスポートしたアーティファクトの圧縮と Cloud EPM 環境へのアップロード	4-14
Planning アーティファクトのインポート	4-15
検証とトラブルシューティング	4-16
Essbase アーティファクトの移行	4-16
Financial Consolidation and Close への Financial Management の移行	4-18
サポートされている移行パス	4-18
Financial Management のメタデータおよびアーティファクトの移行	4-18
Account Reconciliation への Financial Close Management の移行	4-19
サポートされている移行パス	4-19
Financial Close Management アーティファクトのエクスポート	4-19
アーティファクトの Account Reconciliation へのアップロード	4-20
アプリケーションの作成	4-20
Account Reconciliation へのアーティファクトのインポート	4-21
検証とトラブルシューティング	4-22
Profitability and Cost Management へのオンプレミスの Profitability and Cost Management の移行	4-22

サポートされている移行パス	4-22
Profitability and Cost Management アーティファクトのエクスポート	4-22
Profitability and Cost Management へのテンプレート・ファイルのアップロード	4-25
Profitability and Cost Management へのテンプレート・ファイルのインポート	4-25
Enterprise Profitability and Cost Management へのオンプレミスの管理元帳アプリケーションの移行	4-26
Strategic Modeling への Strategic Finance の移行	4-26
サポートされている移行パス	4-27
移行のための Strategic Finance モデルおよびテンプレートの準備	4-27
Cloud EPM での Planning モジュール・アプリケーションの作成および戦略モデリングの有効化	4-29
Strategic Modeling へのオフライン・モデルの移行	4-29
Strategic Modeling への Strategic Finance テンプレートのインポート(オプション)	4-32
Strategic Modeling での移行したモデルおよびテンプレートの有効化	4-33
連結階層の作成	4-34
Data Relationship Management から Oracle Enterprise Data Management Cloud への移行	4-34
FDMEE ベースのアプリケーションの移行に関する考慮事項	4-35

A Cloud EPM への移行のための役割マッピング

Planning	A-1
Financial Management	A-2
Financial Close Management	A-4
Profitability and Cost Management および Enterprise Profitability and Cost Management	A-5
Data Relationship Management	A-6

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクルのアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc>)を参照してください。

Oracle Support へのアクセス

サポートをご契約のお客様には、My Oracle Support を通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> か、聴覚に障害のあるお客様は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

ドキュメントのフィードバック

このドキュメントに対するフィードバックを送るには、Oracle Help Center トピックのページの下部にあるフィードバック・ボタンをクリックします。epmdoc_ww@oracle.com に電子メールを送信することもできます。

1

移行の使用

移行では、Narrative Reporting 以外の Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management サービス内のライフサイクル管理アクティビティを実行できます。

- ライフサイクル管理用の移行へのアクセス
- スナップショットについて
- アーティファクトとアプリケーションのバックアップ
- サービスへのアーカイブのアップロード
- 環境からのファイルおよびスナップショットのダウンロード
- スナップショットとアーカイブの削除
- エクスポート操作の繰返し
- スナップショットとアーカイブの名前変更
- インポート・オプションの設定
- スナップショットからのアーティファクトとアプリケーションのインポート
- アーティファクト 変更履歴の表示
- 移行ステータス・レポートの生成

このガイドについて

移行は、次の Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management サービスに適用されます。


- Account Reconciliation
- Planning
- Planning モジュール
- フリーフォーム
- Financial Consolidation and Close
- Tax Reporting
- Profitability and Cost Management
- Enterprise Profitability and Cost Management
- Oracle Fusion Cloud Enterprise Data Management
- Sales Planning
- Strategic Workforce Planning

ライフサイクル管理用の移行へのアクセス

ホーム・ページのカードから「移行」にアクセスします。

移行は、テスト環境と本番環境で別々に使用できます。

移行にアクセスするには:

1. サービスにアクセスします。 *管理者用スタート・ガイド*の **Cloud EPM** へのアクセスを参照してください。
2. 次のステップを実行します:
 - 「**ツール**」、「**移行**」の順にクリックします。
 - **Profitability and Cost Management** のみ: 「**アプリケーション**」、「**移行**」の順にクリックします。
 -  (ナビゲータ)、「**移行**」の順にクリックします。

スナップショットについて

毎日、環境の操作メンテナンス中に **Oracle** では環境のコンテンツがバックアップされ、既存のアーティファクト、設定データおよびデータ管理ステージング表データのメンテナンス・スナップショットが作成されます。


その後、このスナップショットを使用して、コンテンツを別の環境に移行できます。メンテナンス・スナップショットの詳細な説明は、*管理者用スタート・ガイド*のメンテナンス・スナップショットの概要を参照してください。

また、サービス管理者は、任意の時点で環境の完全バックアップ・スナップショットまたはアーティファクトの増分バックアップ・スナップショットを作成できます。[アーティファクトとアプリケーションのバックアップ](#)を参照してください。

監査データおよびジョブ・コンソール・データは、**Planning**、**Planning** モジュールおよびフリーフォームのアプリケーション・スナップショットには含まれません。監査データやジョブ・コンソール・データをターゲット環境にコピーする必要がある場合は、**cloneEnvironment EPM** 自動化コマンドまたは **Cloud EPM 環境のクローニング**を使用します。

スナップショットの有効性

通常、スナップショットは、環境の前後の更新と互換性があります。たとえば、**Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management** の **19.09** 更新のスナップショットは、**19.08** および **19.10** 環境と互換性があり、これらの環境にインポートできます。

 ノート:

- Account Reconciliation、Narrative Reporting および Oracle Fusion Cloud Enterprise Data Management では、ある月次更新から前回の月次更新へのスナップショットの移行はサポートされていません(たとえば、本番環境の前にテスト環境がアップグレードされたときに、そのウィンドウ中にテスト環境と本番環境の間でスナップショットを移動する場合など)。同じ月次更新または次回の月次更新への移行のみサポートされます。22.12 より前のスナップショットは、Oracle Enterprise Data Management Cloud でサポートされていません。
- 他のすべてのビジネス・プロセスは、ある月次更新から、前回または次回の月次更新へのスナップショットの移行をサポートしています。

自己責任で、このスナップショットの互換性ガイダンスを無視して、古いスナップショットの環境へのインポートを試行できます。これは場合によっては機能する可能性があります。移行ステータス・レポートを確認することで、移行が成功したことを検証できます。オラクル社は、このアプローチをテストも認証もしていません。

スナップショットとファイル保持ポリシー

作成したファイルとスナップショットまたは環境にアップロードしたファイルとスナップショットは、60 日後に削除されます。日次メンテナンス・プロセスでは、環境をモニターして 60 日より古いスナップショットが自動的に削除されます。すべてのスナップショットの合計サイズが 150GB を超えると、スナップショットの合計サイズが 150GB 未満になるまで、過去 60 日間のスナップショットが古い順に削除されます。日次メンテナンスのスナップショットはサイズにかかわらず常に保存されます。メンテナンス・スナップショットが 150GB より大きい場合、そのメンテナンス・スナップショットのみが保存され、他のスナップショットはすべて削除されます。

Data Management プロセス・ログ・ファイルの保存期間は 7 日間のみです。保持する必要のあるファイルはローカル・マシンに定期的にダウンロードすることをお勧めします。

スナップショットの XML ファイルについて

Cloud EPM スナップショットに含まれる XML ファイルでは、オラクルが定義した専用の書式が使用されます。この書式は、Cloud EPM のリリース間で発生する変更に応じて変更されることがあります。使用するカスタム・プロセスまたはユーティリティで、Cloud EPM のリリース間で XML 書式の変更がないという想定をしないでください。

手動によるスナップショットの変更

スナップショットに加える変更は、スナップショットを生成する前にアプリケーションに加える必要があります。アーティファクトを更新するためにスナップショットの XML ファイルを変更しないでください。スナップショットの XML ファイルを手動で更新すると、インポートが失敗する場合があります。インポートが機能しても、アプリケーションが正しく実行されない場合があります。

オラクル社は、スナップショットの XML ファイルの手動による変更はサポートしていません。

変更日を調べる方法

「移行」の「スナップショット」タブを使用して、使用可能なスナップショットのサイズと最終変更日時を識別します。

Categories Snapshots Reports			
Name	Size	Last Modified Time	Actions
▶ Artifact Snapshot	5 MB	01/07/2019 06:07:37	...
▶ drill_through	30 KB	01/07/2019 08:29:17	...

最終変更時刻は、「ユーザー・プリファレンス」で指定したタイム・ゾーンに基づいて表示されます。設定されていない場合、最終変更時刻はブラウザのタイム・ゾーンに基づいて表示されます。

スナップショット・サイズと最終変更時刻を表示するには:

1. 「移行」にアクセスします([ライフサイクル管理用の移行へのアクセス](#)を参照)。
2. 「スナップショット」をクリックします。

アーティファクトとアプリケーションのバックアップ

2種類のスナップショット(バックアップとエクスポート)を作成できます。

次も参照:

- [アプリケーションのバックアップ](#)
- [アーティファクトのエクスポート](#)

アプリケーションのバックアップ

バックアップを使用して、環境のクローニングに使用可能なスナップショットを作成し、たとえば、本番インスタンスからテスト・インスタンスにアプリケーションを移行してトラブルシューティングや追加の開発作業を行います。

環境をバックアップする場合、アプリケーションをそのすべてのデータおよびアーティファクトとともにエクスポートすることで、日次メンテナンス・スナップショットに似た環境全体のスナップショットを作成します。バックアップには、ドキュメント・リポジトリ、コア(以前の **Planning**)、**Data Management**、**Calculation Manager**、およびグループとメンバーシップに属するアーティファクトが含まれます。コアのアーティファクトには、現在のアプリケーションに必要なリレーショナル・データと **Essbase** データ、グローバル・アーティファクトとセキュリティ・アーティファクト、構成とプラン・タイプ・アーティファクトなどが含まれます。これらのカテゴリに属するアーティファクトの可用性は、現在の環境内のアプリケーションによって管理されます。

Essbase データのバックアップ

Oracle Essbase データのバックアップは、**Essbase** の停止により実行されます(コールド・バックアップ)。潜在的なデータ破損を防ぐために、**Essbase** データのバックアップを開始する前に、**ASO** および **BSO** キューブを変更するすべてのプロセス(連結、再構築など)を停止します。

Planning のバックアップのみ

バックアップ・プロセスにより、集約ストレージ(ASO)キューブで有効になっているメンバー・ドリブン・スマート・リスト(ある場合)に関連付けられたデータがエクスポートされます。ASO、キューブ設計およびデータ量に対して有効な該当メンバー数によっては、データをエクスポートするために生成された MDX 問合せに、深さのあるクロス結合セクションが含まれる場合があります。これが原因でメモリー割当てエラーによりバックアップ・プロセスが失敗する可能性があります。

常に日次メンテナンス・スナップショットを使用して Planning 環境を復元してください。

エンタープライズ仕訳のバックアップ

テスト環境から本番環境に移行するときは、次のものを含めないでください:

- JOURNAL_ID (「エンタープライズ仕訳」、「ディメンション」、JOURNAL_ID の順に選択してアクセスします)。
- 収集間隔データ(「エンタープライズ仕訳」、「収集間隔」データの順に選択してアクセスします)。

ただし、ソース・アプリケーションでチームを定義している場合は、チーム・データを含める必要があります(「クローズ・タスク」、「チーム」を選択してアクセスします)。

データ管理のバックアップ

データ管理の LCM モード設定により、サービス管理者は、ステージング表(ワークベンチ)データのバックアップおよびエクスポートを制御できます。LCM モードの設定によっては、データのエクスポート・プロセスに時間がかかる場合があります。このとき、システムはメンテナンス・モードになります。

1. ステージング表データを移行する前に、ベースライン・スナップショットを作成します。ベースライン・スナップショットは、増分スナップショットにデータを追加するオプションを選択するために必要です。ベースライン・スナップショットを作成するには、データ管理で、「スナップショット・タイプ」値として「すべて」を選択します。
2. デフォルトのエクスポート設定を使用して作成される増分スナップショットには、ステージング表データは含まれません。このデータをエクスポートおよびインポートするには、必要なエクスポート設定をデータ管理で指定します。具体的には、「LCM モード」オプションの値として**単一スナップショット - 設定およびデータ**を選択します。

詳細な手順は、*データ管理の管理*で次のソースを参照してください:

- ライフサイクル(LCM)スナップショット・モードの使用
- スナップショット・エクスポート・ジョブの実行

Oracle Enterprise Data Management Cloud のバックアップ

このアプリケーションは、バックアップ・スナップショットを作成すると、メンテナンス・モードになります。

トラブルシューティング

オペレーション・ガイドのインポート、エクスポートおよびバックアップ・エラーの解決を参照してください。

アーティファクトのエクスポート

エクスポートを使用して、環境内の特定のアーティファクトの増分バックアップを作成します。通常は、増分スナップショットを使用して、別の環境の更新に使用可能なバックアップを作成します。

例:


- テスト環境でテスト済のアーティファクトをエクスポートして中間スナップショットを作成し、これを本番環境にインポートできます。同様に、ある環境の Essbase データをエクスポートし、そのデータを別の環境にインポートできます。
- 環境で作成済のグループをエクスポートして、別の環境に同一のグループを作成します。エクスポートするグループを選択するには、「**カテゴリ**」で「**グループとメンバーシップ**」、**「ネイティブ・ディレクトリ**」の順に展開し、「**グループ**」を選択します。

Note:

移行では、アプリケーション監査レコードのエクスポートおよびインポートはサポートされていません。監査レコードをエクスポートする必要がある場合、ビジネス・プロセスの監査機能を使用して、監査データのエクスポートを使用可能にします。詳細は、ビジネス・プロセスの管理ガイドを参照してください。

スナップショットを作成するには:

1. 「**移行**」にアクセスし([ライフサイクル管理用の移行へのアクセス](#)を参照)、次のいずれかのステップを完了します。
 2. **アプリケーションをバックアップするには:**
 - a. 「**バックアップ**」をクリックします。
 - b. 「**バックアップ**」に宛先フォルダ名を入力します。デフォルトで、アプリケーションの完全スナップショットは Backup Date (例: Backup 18-05-14)フォルダにエクスポートされます(フォルダ名は変更可能)。
フォルダ名に、ネイティブ・オペレーティング・システムでサポートされていない文字を入力しないでください。たとえば、**Windows** ではフォルダ名にコロンを使用できません。
操作の進捗が示される移行ステータス・レポートが表示されます。
 - c. 「**リフレッシュ**」をクリックすると、進捗をモニターする移行ステータス・レポートが更新されます。「**閉じる**」をクリックすると終了します。
バックアップがなんらかの理由で失敗すると、レポートにはステータスとして「**失敗**」と表示されます。「**失敗**」をクリックすると「**移行詳細**」画面が開かれ、バックアップ・プロセスが失敗した理由と修正処理が示されます。バックアップの失敗の原因となったエラーを修正した後で、再度操作を試行できます。
バックアップを含むフォルダが、「**スナップショット**」にリストされます。
3. **選択したアプリケーションのアーティファクトを環境からエクスポートするには:**
 - a. 「**カテゴリ**」で、エクスポートするアーティファクトを選択します。
 - コンポーネントのすべてのアーティファクトをエクスポートするには、コンポーネント名の横にあるチェック・ボックスを選択します。

- コンポーネントの特定のアーティファクトをエクスポートするには、コンポーネント名をクリックします。「**アーティファクト・リスト**」で使用可能なフォルダを開き、エクスポートするアーティファクトを選択します。アプリケーションのバックアップ操作中にのみ有効なアーティファクトがグレー表示され、増分バックアップ中には選択できません。
- b. **オプション:**  (「選択済アーティファクト」)をクリックして、エクスポート用に選択したアーティファクトのリストを確認します。
- c. 「**エクスポート**」をクリックします。
- d. 「**エクスポート**」で「**OK**」をクリックします。
デフォルトで、増分エクスポート・スナップショットは `USER_NAME Date` (例: `john.doe@oracle.com 18-05-14`) フォルダにエクスポートされます(フォルダ名は変更可能)。フォルダ名に、ネイティブ・オペレーティング・システムでサポートされていない文字を入力しないでください。たとえば、**Windows** ではフォルダ名にコロンを使用できません。
操作の進捗が示される移行ステータス・レポートが表示されます。
- e. 「**リフレッシュ**」をクリックすると、進捗をモニターする移行ステータス・レポートが更新されます。「**閉じる**」をクリックすると終了します。
エクスポートが何らかの理由で失敗すると、レポートにはステータスとして「**失敗**」と表示されます。「**失敗**」をクリックすると「**移行詳細**」画面が開かれ、エクスポートが失敗した理由と修正処理が示されます。エクスポートの失敗の原因となったエラーを修正した後で、再度エクスポート操作を試行できます。
エクスポートされたアーティファクトを含むフォルダが、「**スナップショット**」にリストされます。

重要な考慮事項

Enterprise Profitability and Cost Management の場合:

完全バックアップ・モードで実行される移行エクスポートでは、各 **POV** の最新の計算実行の詳細のエクスポートに加えて、過去 7 日以内に失敗した計算実行も含まれます。これには、「**完了**」または「**警告ありで完了**」以外のステータスの過去 1 週間の実行が含まれます。

トラブルシューティング

オペレーション・ガイドのインポート、エクスポートおよびバックアップ・エラーの解決を参照してください。

サービスへのアーカイブのアップロード

アーティファクト、データおよびメタデータを環境にインポートするには、これらのデータのアーカイブを事前にその環境にアップロードしておく必要があります。

このオプションを使用して、**ZIP** ファイル(データ、メタデータ、ルール定義、ディメンション定義、マップされたトランザクション、バックアップ・スナップショットなどを含む)をローカル・コンピュータからサービスにアップロードします。同じ名前のファイルがサービスにすでに存在する場合は、**ZIP** ファイルをアップロードできません。

Web インタフェース(たとえば、移行)を使用する場合は、**Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management** によって、次のアップロード・ファイル・サイズの制限が適用されます:

- スナップショットの最大アップロード・サイズは **2 GB**

- ファイルの最大アップロード・サイズは 500 MB

これらの制限を超えるファイルをアップロードする場合は、`uploadFile EPM` 自動化コマンドの使用を検討してください。

ノート:

サービスにアップロードするアーカイブは 60 日間保存され、それ以後は自動的に削除されます。

アーカイブをサービスにアップロードするには:

1. 「移行」にアクセスします。[ライフサイクル管理用の移行へのアクセス](#)を参照してください。
2. 「スナップショット」、「アップロード」の順にクリックします。
3. 「参照」をクリックし、サービスにアップロードする ZIP ファイルを選択して「アップロード」をクリックします。
4. 「OK」をクリックします。

環境からのファイルおよびスナップショットのダウンロード

アーティファクトおよびデータのバックアップを保持するには、本番環境およびテスト環境からスナップショットをダウンロードする必要があります。Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management 環境からダウンロードできるファイルのサイズに制限はありません。

ファイルをサービスからローカル・コンピュータにダウンロードするには:

1. 「移行」にアクセスします。[ライフサイクル管理用の移行へのアクセス](#)を参照してください。
2. 「スナップショット」をクリックします。
3. ダウンロードするスナップショットまたはファイルを選択し、**...**(アクション)をクリックしてから「ダウンロード」を選択します。

日次メンテナンス時など、現在のスナップショットの生成またはアーカイブの処理中である環境をクローニングしようとする、「ファイルが見つかりません」エラーを受け取ります。

4. 画面の指示に従って、ファイルを保存するか開きます。

スナップショットとアーカイブの削除

作成したスナップショットを環境から削除する前に、必ずそのスナップショットをローカル・コンピュータにダウンロードしてください。

▲ 注意:

日次メンテナンス・スナップショットは削除しないでください。

スナップショットまたはアーカイブをサービスから削除するには:

1. 「**移行**」にアクセスします。 [ライフサイクル管理用の移行へのアクセス](#)を参照してください。
2. 「**スナップショット**」をクリックします。
3. 削除するスナップショットまたはアーカイブを選択します。
4. ... (「アクション」) をクリックして 「**削除**」 を選択します。
5. 「**OK**」 をクリックします。

エクスポート操作の繰返し

前のエクスポート操作を繰り返して、新規スナップショットを生成できます。エクスポート操作を繰り返す場合、前にエクスポート操作で使用した設定が再利用されます。

エクスポート操作を繰り返すには:

1. 「**移行**」にアクセスします。 [ライフサイクル管理用の移行へのアクセス](#)を参照してください。
2. 「**スナップショット**」をクリックします。
3. 前にサービスからエクスポートしたスナップショットを選択します。
スナップショットのエクスポートに使用した設定が、エクスポート操作に使用されます。
4. ... (「アクション」) をクリックして 「**エクスポートの繰返し**」 を選択します。
5. 「**エクスポートの繰返し**」 で、エクスポート・フォルダの名前を変更してから 「**OK**」 をクリックします。

操作の進捗が示される移行ステータス・レポートが表示されます。

6. 「**リフレッシュ**」 をクリックすると、進捗をモニターする移行ステータス・レポートが更新されます。「**閉じる**」 をクリックすると終了します。

エクスポートが何らかの理由で失敗すると、レポートにはステータスとして「**失敗**」と表示されます。「**失敗**」 をクリックすると「**移行詳細**」画面が開かれ、エクスポートが失敗した理由と修正処理が示されます。エクスポートの失敗の原因となったエラーを修正した後で、再度エクスポート操作を試行できます。

エクスポートされたアーティファクトを含むフォルダが、「**スナップショット**」にリストされます。

スナップショットとアーカイブの名前変更

名前の不一致を解決するには、アーカイブまたはスナップショットの名前を変更します。たとえば、Planning ジョブで使用されているファイル名と一致するようにアーカイブの名前を変更できます。

スナップショットとファイルの名前を変更するには:

1. 「**移行**」にアクセスします。[ライフサイクル管理用の移行へのアクセス](#)を参照してください。
2. 「**スナップショット**」をクリックします。
3. 名前を変更するスナップショットまたはアーカイブを選択します。
4. ... (「アクション」) をクリックして 「**名前変更**」 を選択します。
5. 必要な変更を行い、「**OK**」 をクリックします。
6. 「**OK**」 をクリックします。


インポート・オプションの設定

インポート・オプションでは、アップロードしたファイルおよびスナップショットからデータを環境にインポートする条件を指定します。

データをインポートするためのデフォルト動作:

- 移行では、インポート中に宛先の場所でのターゲット・ディメンション・メンバーの検証を常にスキップします。
- 移行では、最大エラーしきい値として **100** を使用します。

インポート・オプションを設定するには:

1. 「**移行**」にアクセスします。[ライフサイクル管理用の移行へのアクセス](#)を参照してください。
2. 「**スナップショット**」、 (「移行オプション」)の順にクリックします。
3. グループおよびメンバーシップ情報をインポートする方法を指定します。使用可能なオプションは次のとおりです:
 - 作成または更新
「アクセス制御」で新規グループを追加するか、既存のグループのグループ・メンバーシップを更新します。また、アプリケーションの役割をユーザーおよびグループに割当または割当解除します。
 - 作成
新規グループを追加します。既存のグループに対する変更はインポートされません。また、アプリケーションの役割をユーザーおよびグループに割り当てます。
 - 更新
インポート・ファイルの情報に基づいて既存のグループを変更します。新規グループは追加されません。また、アプリケーションの役割をユーザーおよびグループに割当または割当解除します。
 - 削除
インポート・ファイルにある既存のグループを削除します。また、アプリケーションの役割をユーザーおよびグループから割当解除します。

- 完了したら、「保存して閉じる」をクリックします。

スナップショットからのアーティファクトとアプリケーションのインポート

スナップショットをインポートして、別の環境のクローンを作成するか、別の環境からアーティファクトを移行できます。

この処理を開始するには、ターゲット環境にインポートするバックアップまたは増分スナップショットを事前にアップロードしておく必要があります。インポート操作の進行中に環境内でジョブを実行しないでください。基礎となるデータやメタデータがインポート操作に影響されることがあるため、ジョブが不正確な結果に終わる可能性があります。

スナップショットおよびファイルをアップロードする方法

- 移行を使用してスナップショットをソース環境からダウンロードし、ターゲット環境にアップロードします。[環境からのファイルおよびスナップショットのダウンロードおよびサービスへのアーカイブのアップロード](#)を参照してください。
- downloadFile および uploadFile EPM 自動化コマンドを使用します。
- copySnapshotFromInstance EPM 自動化コマンドを使用して、別の環境からスナップショットをコピーします。

重要な考慮事項

- 次に示す例外を除き、Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management は、月次更新が相互に 1 か月以内である場合、ソース・スナップショットからターゲット環境へのインポートをサポートします。たとえば、ソース環境が 24.08 の更新である場合、ターゲット環境は 24.07 または 24.09 の更新のいずれかになります。

例外:

- 戦略モデリング:** インポートは、両方の環境が完全に同じ更新である場合にのみ許可されます。たとえば、ソース環境が 24.08 の更新である場合、ターゲット環境も 24.08 である必要があります。
- Account Reconciliation および Oracle Fusion Cloud Enterprise Data Management:** インポートは、ターゲット環境がソース環境と同じ月次更新または次の更新である場合に許可されます。たとえば、ソース環境が 24.08 の更新である場合、ターゲット環境は 24.08 または 24.09 のいずれかになります。

インポート・プロセスでは、プロセスで使用されるスナップショットに環境の現行バージョンとの互換性がない場合に、次の警告が表示されます。

EPMLCM-26000: このスナップショットは、この更新と互換性のない EPM Cloud バージョン `VERSION_NUMBER` のものであり、インポート・エラーになる可能性があります。

Account Reconciliation および Oracle Enterprise Data Management Cloud のスナップショット以外で、互換性がないスナップショットをアップグレードして、環境の現行バージョンとの互換性を確保できます。*EPM 自動化の操作の監査用の古い Cloud EPM 環境の再作成*を参照してください。

- LCM インポートを実行した後は、LCM インポートが完了した後にサインオフして、再度サインインすることをお勧めします。
- インポート操作を開始すると、Cloud EPM で移行ステータス・レポートが表示されます。「リフレッシュ」をクリックすると、定期的にレポートが更新され、進捗がモニターされます。

インポートがなんらかの理由で失敗すると、移行ステータス・レポートにはステータスとして「**失敗**」と表示されます。ステータスをクリックすると「移行詳細」画面が開かれ、インポートが失敗した理由と必要な修正処理が示されます。

- 移行では、アプリケーション監査レコードのインポートはサポートされていません。
- ユーザーをインポートせず、ソース・スナップショット内のユーザーがターゲット環境で事前定義済役割を持っていない場合、次のエラーが表示されます:

EPMIE-00070: 割り当てられた役割のインポート中にユーザーが見つかりませんでした。

- **データ管理の場合:** スナップショットにステージング・データが含まれている場合は、インポート・プロセスに時間がかかる場合があります。
- **Oracle Enterprise Data Management Cloud の場合:** アーティファクトおよびスナップショットをインポートすると、システムは移行モードになります。

Essbase データのインポートの考慮事項

Planning アプリケーションでは、移行を使用した Oracle Essbase データの増分ロードは許可されていません。かわりに、完全なスナップショットをインポートする必要があります。Essbase データのみをインポートしようとする、「Essbase データのインポートはアプリケーションの作成中のみサポートされています。」という警告が生成されます。

Essbase データをインポートするには、次のいずれかの方法を使用します:

- アウトライン・ロード・ユーティリティを使用して、エクスポート・ファイルからデータをロードします。手順は、『*Planning の管理*』のデータのインポートとエクスポートを参照してください
- アプリケーションを再作成し、移行を使用してスナップショットをインポートします。手順は、『*EPM 自動化の操作*』ガイドの `recreate` コマンドを参照してください

トラブルシューティング

オペレーション・ガイドのインポート、エクスポートおよびバックアップ・エラーの解決を参照してください。

別の環境のクローンを作成するためのバックアップのインポート

バックアップ・スナップショット(デフォルトの名前は Backup Date)をインポートして、別の環境のクローンを作成します。

すでにアプリケーションが存在する環境にバックアップ・スナップショットをインポートしないでください。既存のアプリケーションがある環境にバックアップ・スナップショットをインポートする場合は、最初に `recreate EPM 自動化` コマンドを実行して、現在の環境をクリーン状態に復元してからバックアップ・スナップショットをインポートしてください。

バックアップをインポートして別の環境のクローンを作成するには:

1. 「**移行**」にアクセスします。ライフサイクル管理用の移行へのアクセスを参照してください。
2. 「**スナップショット**」をクリックします。
3. インポートするバックアップ・スナップショットの横にある... (「アクション」)をクリックしてから「**インポート**」を選択します。
4. 「**インポート**」で「**OK**」をクリックします。


インポートの進捗をモニターできる移行ステータス・レポートが開きます。レポートを頻繁にリフレッシュして、操作がエラーなしで完了したことを確認します。

環境へのアーティファクトのインポート

特定のアーティファクトをバックアップ・スナップショットまたは増分スナップショットからインポートし、環境間でアーティファクトを移行します。たとえば、テスト済のアーティファクトのスナップショットをテスト環境から本番環境にインポートできます。同様に、Essbase データとアーティファクトを、別の環境からエクスポートして作成した増分スナップショットからインポートできます。

一部のアーティファクトのインポートは、環境に指定されたインポート設定によって管理されます。[インポート・オプションの設定](#)を参照してください。

アーティファクトをインポートするには:

1. 「**移行**」にアクセスします。[ライフサイクル管理用の移行へのアクセス](#)を参照してください。
2. 「**スナップショット**」をクリックします。
3. インポートするアーティファクトが格納されているスナップショットを展開します。
4. インポートするアーティファクトを選択します。
 - **特定のコンポーネントのすべてのアーティファクトをインポートするには:**
 - a. スナップショットを展開して、コンポーネント名をクリックします。たとえば、**HP-Vision** をクリックして、スナップショットに含まれる **Vision** サンプル・アプリケーションのアーティファクトのリストにアクセスします。
 - b. 「**すべて選択**」をクリックします。
 - c. 「**インポート**」をクリックします。
 - **コンポーネントの特定のアーティファクトをインポートするには:**
 - a. スナップショットを展開して、コンポーネント名をクリックします。たとえば、**HP-Vision** をクリックして、スナップショットに含まれる **Vision** サンプル・アプリケーションのアーティファクトのリストにアクセスします。
 - b. 「**アーティファクト・リスト**」で使用可能なアーティファクトのリストを展開して、インポートするアーティファクトを選択します。
 - c. **オプション:**  (「**選択済アーティファクト**」) をクリックして、インポート用に選択したアーティファクトのリストを確認します。
 - d. 「**インポート**」をクリックします。
5. 「**OK**」をクリックして、インポート操作を開始することを確認します。

移行ステータス・レポートが開きます。このレポートを使用して、操作の進捗をモニターします。

2

レポートの生成

移行には、移行ステータス・レポート、変更されたアーティファクト・レポートおよびアーティファクト更新レポートが用意されています。

これらのレポートは、移行でユーザーの操作を管理するのに役立ちます。

- [移行ステータス・レポートの生成](#)
- [アーティファクト 変更履歴の表示](#)
- [アーティファクト 更新レポートの生成](#)

移行ステータス・レポートの生成

移行ステータス・レポートには、サービス・インスタンスで実行されたアーティファクトの移行に関する情報が含まれます。各移行について、このレポートには、移行を実行したユーザー、ソース、宛先、開始時間、完了時間、継続時間、ステータスなどの情報が示されます。

レポートで示された開始時間および完了時間は、ブラウザのタイム・ゾーンに基づく現在時刻を反映します。

失敗した移行の場合、ステータスをクリックすることで、ソースおよび宛先のアプリケーション、アーティファクト・パス、アーティファクト名、および移行の失敗の原因となるエラーなどの情報を表示できます。

ノート:

- 履歴移行ステータス・データは 30 日後に削除されます。
- `recreate EPM` 自動化コマンドを使用して環境を再作成した場合、移行ステータス・レポートに過去の移行に関する情報は含められません。

移行ステータス・レポートを表示するには:

1. 「**移行**」にアクセスします。[ライフサイクル管理用の移行へのアクセス](#)を参照してください。
2. 「**レポート**」、「**移行ステータス**」の順にクリックします。
レポートが自動的に生成され、過去 30 日間に実行された移行をすべて表示します。
3. レポートを再生成するには、「**リフレッシュ**」をクリックします。
4. レポートを閉じるには「**閉じる**」をクリックします。

アーティファクト変更履歴の表示

変更履歴レポートを使用して、元のスナップショットの作成後に変更されたアーティファクトを識別します。変更されたアーティファクトの識別は、新規スナップショットを作成して、アーティファクトに加えられた変更をバックアップする際に役立ちます。

サービスではこのレポートを自動的に生成して、すべてのユーザーによって変更されたすべてのアーティファクトをリストします。レポートを再生成して、特定のアーティファクトのみ、または特定のユーザーが変更したアーティファクトのみをリストできます。

変更履歴レポートを表示するには:

1. 「**移行**」にアクセスします。[ライフサイクル管理用の移行へのアクセス](#)を参照してください。
2. 「**スナップショット**」をクリックして、スナップショットを選択します。
3. **...** (アクション)をクリックして、「**変更履歴**」を選択します。
変更履歴レポートが表示されます。
4. **オプション:** 必要に応じて、レポートをフィルタします。
 - 「**アーティファクト名**」に名前を入力して、特定のアーティファクトのレポートを表示します。
 - 「**変更者**」にユーザー名を入力して、特定のユーザーが変更したアーティファクトをリストするレポートを生成します。
5. **オプションI:** アーティファクトをエクスポートします。
 - a. エクスポートするアーティファクトを選択します。
 - レポートにリストされたすべてのアーティファクトを含むスナップショットを作成するには、「**すべて選択**」をクリックします。
 - 特定のアーティファクトを含むスナップショットを作成するには、スナップショットに含めるアーティファクトごとに、アプリケーション名の横のチェック・ボックスを選択します。
 - b. 「**エクスポート**」をクリックします。
 - c. 一意のスナップショット名を入力し、「**OK**」をクリックします。
移行ステータス・レポートをレビューして、エクスポートがエラーなしで完了したことを確認します。
 - d. 「**閉じる**」をクリックすると移行ステータス・レポートが終了します。

アーティファクト更新レポートの生成

アーティファクト更新レポートには、アーティファクトの場所、属するアプリケーション、アーティファクト・タイプなどの情報が含まれます。

アーティファクト更新レポートには、更新されたアーティファクトに関する次の情報が含まれます。

- アーティファクトが属するアプリケーション
- アーティファクト名
- アーティファクト・タイプ

- アーティファクトを変更したユーザーの名前
- アーティファクトが変更された日付
- アーティファクトの場所

このレポートは、サービスのすべてのコンポーネントまたは選択したコンポーネントについて生成できます。

アーティファクト更新レポートを生成するには:

1. 「**移行**」にアクセスします。[ライフサイクル管理用の移行へのアクセス](#)を参照してください。
2. 「**レポート**」、「**アーティファクト更新**」の順にクリックします。
3. レポート設定の指定:
 - a. **オプション: 「アーティファクト名」**に、レポートを生成するアーティファクトの名前(例: 通貨)を入力します。すべてのアーティファクトについてレポートするには、*(アスタリスク)を使用します。
 - b. **オプション: 「アーティファクト・タイプ」**に、レポートを生成するアーティファクト・タイプ(例: 通貨ディメンション)を入力します。すべてのアーティファクト・タイプについてレポートするには、*(アスタリスク)を使用します。
 - c. **オプション: 「変更者」**にレポートを生成するユーザーの名前を入力します。すべてのユーザーについてレポートするには、*(アスタリスク)を使用します。
 - d. レポートを生成する期間を指定します。
 - e. レポートを生成するコンポーネントを選択します。
4. 「**レポートの実行**」をクリックします。

「アーティファクト更新レポートの詳細」が表示されます。レポートの内容に満足できない場合は、「**戻る**」をクリックしてレポート・パラメータを修正してから、レポートを再生成します。
5. レポートで行う操作を選択します。
 - 「**アクション**」、「**エクスポート**」の順にクリックして、レポートをファイルに保存します。
 - 「**アクション**」、「**CSVにエクスポート**」の順にクリックして、レポートをカンマ区切り値(CSV)ファイルにエクスポートします。
 - 「**アクション**」、「**印刷プレビュー**」の順にクリックして、レポートをプレビューします。
6. 「**閉じる**」をクリックするとレポートが終了します。

3

Cloud EPM 環境のクローニング

環境のクローニング機能は、Narrative Reporting を含むビジネス・プロセス環境をクローニングする画面ベースの方法を提供します。

次のタイプのレコードをクローニングできます:

- **ユーザー役割と事前定義済役割**(アイデンティティ・ドメイン・アーティファクト)
- **データ管理**(オプション) - Account Reconciliation、Enterprise Profitability and Cost Management、Financial Consolidation and Close、フリーフォーム、Planning、Profitability and Cost Management および Tax Reporting
- **アプリケーション監査**(オプション) - Enterprise Profitability and Cost Management、フリーフォームおよび Planning
- **ジョブ・コンソール**(オプション) - Enterprise Profitability and Cost Management、Financial Consolidation and Close、フリーフォーム、Planning および Tax Reporting
- **保管されたスナップショットとファイル**(受信ボックスと送信ボックスのコンテンツおよび保管されたスナップショット)
- **日次メンテナンス開始時間**
- **アプリケーション・プロパティ**(オプション) - Account Reconciliation のみ

このクローニング方法は、cloneEnvironment EPM 自動化コマンドを使用するかわりの方法となります。

サポートされているクローニング・シナリオ

環境のクローニングは、次のような移行シナリオで特に役立ちます:

- Oracle Cloud Classic から OCI (Gen 2) Cloud EPM へのクローニング
- 本番環境からテスト環境へのクローニング
- テスト環境から本番環境へのクローニング

サポートされていないクローニング・シナリオ

- Account Reconciliation、Oracle Fusion Cloud Enterprise Data Management および Narrative Reporting では、前回の月次更新の環境への環境のクローニングはサポートされません。
- Planning に、カスタム期間メンバーによって置換された、名前が変更されたシード済期間メンバーが含まれている場合、クローニングが失敗することがあります。たとえば、シード済の YearTotal 期間メンバーの名前を **unused_YearTotal** に変更し、元のシード済名 (YearTotal など) を持つ代替タイプの期間メンバーを追加すると、クローニングが失敗する可能性があります。

クローニングできるスナップショット

このクローニング・プロセスでは、最後の日次メンテナンス中に作成された Artifact Snapshot という現在のスナップショットが使用されます。

最後の日次メンテナンスの後に環境に加えた変更をクローニングしたスナップショットに反映させる場合は、`runDailyMaintenance EPM` 自動化コマンドを実行して、Artifact Snapshot を再生成します。

日次メンテナンス時など、現在スナップショットを生成またはアーカイブしている環境をクローニングしようとする、「ファイルが見つかりません」というエラーが発生します。

トラブルシューティング

*Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイド*の環境のクローニングの問題の解決を参照してください。

環境のクローニング前に実行するタスク

環境をクローニングする場合、Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management は、ターゲット環境に現在のアプリケーションの正確なコピーを作成するために必要なすべてのアクションを自動的に完了します。このプロセスを開始する前に、ターゲット環境を準備します:

- ターゲット環境の最新のバックアップ・スナップショットの作成およびアーカイブ。クローニングでは、ターゲット環境の既存のスナップショットまたは受信ボックスおよび送信ボックス内のファイルは削除されません。Artifact Snapshot がターゲット環境に存在する場合、クローニングにより、その名前が `Artifact Snapshot_DATE_TIME` に変更されます(例: `Artifact Snapshot_2021_04_30_17:06:06`)。
- クローニングは、ソース環境およびターゲット環境のスケジュール済の日次メンテナンスの後に開始します。クローニングの進行中にソース環境の日次メンテナンスが開始されると、クローニング・プロセスは終了します。日次メンテナンスの開始時間にクローニングが進行中の場合でも、ターゲット環境のクローニング・プロセスは影響を受けません。このシナリオでは、日次メンテナンスはクローニングの完了後に実行されます。環境のクローニングに時間がかかる場合は、ソース環境の日次メンテナンス開始時間を再スケジュールして、クローニング・プロセスが終了しないようにします。日次メンテナンス開始時間のリセットの詳細は、次を参照してください:
 - *管理者用スタート・ガイド*の環境のメンテナンス開始時間の設定
 - *EPM 自動化の操作*の `setDailyMaintenanceStartTime`
 - *REST API* の日次メンテナンス・ウィンドウ時間の表示および設定

クローニング時の Essbase バージョンの処理

ソース環境とターゲット環境の Oracle Essbase バージョンが一致していない場合は、クローニング・プロセスによって、ターゲット環境の Essbase バージョンが、ソース環境のバージョンと一致するようにアップグレードされます。ただし、ターゲット環境の Essbase バージョンがソースのバージョンと一致するようにダウングレードされることはありません。たとえば、ソースがハイブリッド対応の Essbase を備えた EPM Enterprise Cloud Service 環境で、ターゲットが非ハイブリッドの Essbase を備えたレガシー Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management 環境の場合、クローン・プロセスはターゲット環境がハイブリッド対応の Essbase を使用するようにアップグレードします。

レガシー環境をクローニングする場合は、次のシナリオで説明するように、クローニング・プロセスにより Essbase バージョンが処理されます:

- シナリオ 1 - ハイブリッド・キューブをサポートしない Essbase バージョンを使用するソース・レガシー環境を、ハイブリッド・キューブをサポートする Essbase バージョンを使

用するターゲット・レガシー環境にクローニングします。このシナリオでは、ターゲット環境の Essbase は、ソース環境のバージョンと一致するようにダウングレードされます。

- シナリオ 2: ハイブリッド・キューブをサポートする Essbase バージョンを使用するソース・レガシー環境を、ハイブリッド・キューブをサポートしない Essbase バージョンを使用するターゲット・レガシー環境にクローニングします。このシナリオでは、ターゲット環境の Essbase は、ソース環境のバージョンと一致するようにアップグレードされます。
- シナリオ 3: ハイブリッド・キューブをサポートしない Essbase バージョンを使用するソース・レガシー環境を、ハイブリッド・キューブをサポートする Essbase バージョンをデフォルトで使用するターゲット EPM Standard Cloud Service 環境または EPM Enterprise Cloud Service 環境にクローニングします。このシナリオでは、ターゲット環境の Essbase は、ソース環境のバージョンと一致するようにダウングレードされません。

管理者用スタート・ガイドの EPM Standard Cloud Service および EPM Enterprise Cloud Service のスナップショットの移行パスを参照してください。

環境をクローニングするためのステップ

環境をクローニングする場合は、ターゲット環境に指定されたユーザー・アカウントの事前定義済役割に応じて、次のクローニング・オプションがあります:

Table 3-1 ターゲット環境の事前定義済役割のクローニング・オプション

事前定義済役割	使用可能なクローニングのオプション
サービス管理者	アプリケーション・アーティファクトをクローニングします。オプションで、データ管理レコード、監査データ、ジョブ・コンソール・レコード、受信ボックスと送信ボックスのコンテンツおよび保存されたスナップショットをクローニングします。ユーザーおよび事前定義済役割の割当てはクローニングできません。
サービス管理者およびアイデンティティ・ドメイン管理者	アプリケーション・アーティファクトをクローニングします。オプションで、ユーザーとその事前定義済役割の割当て、データ管理レコード、監査データ、ジョブ・コンソール・レコード、受信ボックスと送信ボックスのコンテンツおよび保存されたスナップショットをクローニングします。

前提条件

- ユーザーに多要素認証(MFA)が設定されていないことを確認します。クローニング環境は、ターゲット環境の基本認可資格証明のみを取得します。
- シングル・サインオン(SSO) - ユーザーを認証するために SSO を設定している場合は、ユーザーが SSO を使用して OCI 環境にログインできるように、SSO を再構成する必要があります。管理者用スタート・ガイドのシングル・サインオンの構成を参照してください
- IP 許可リストの構成 - 「マイ・サービス」の「サービス詳細」画面を使用して Oracle Cloud Classic 環境の IP 許可リストを設定した場合は、setIPAllowlist EPM 自動化コマンドを使用して OCI 環境の IP 許可リストを再構成する必要があります。これにより、リストされた IP アドレスからの接続のみが OCI 環境で許可されるようになります。管理者用スタート・ガイドの安全なアクセスの設定を参照してください。

ソース環境とターゲット環境の間の互換性

次に示す例外を除き、Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management は、月次更新が相互に 1 か月以内であるかぎり、ソース環境とターゲット環境の間のクローニングをサポート

トします。たとえば、ソース環境が 24.08 の更新である場合、ターゲット環境は 24.07、24.08 または 24.09 になります。

例外:

- **戦略モデリング:** クローニングは、両方の環境が完全に同じ月次更新である場合にのみ可能です。たとえば、ソース環境が 24.08 の更新である場合、ターゲット環境も 24.08 である必要があります。
- **Account Reconciliation および Oracle Fusion Cloud Enterprise Data Management:** クローニングは、ターゲット環境がソース環境と同じ月次更新または次の月次更新である環境間で許可されます。たとえば、ソース環境が 24.08 の更新である場合、ターゲット環境は 24.08 または 24.09 のいずれかになり、24.07 ではありません。

構成ステップ

環境をクローニングするには:

1. クローニングする環境にサインインします。サービス管理者として、またはアイデンティティ・ドメイン管理者でもあるサービス管理者としてサインインできます。
Oracle Cloud Classic から OCI へのクローニングの場合は、アイデンティティ・ドメイン管理者でもあるサービス管理者としてサインインし、ユーザーとその役割が OCI 環境にクローニングされるようにする必要があります。
2. 次の手順を完了します。
 - 「ツール」、「環境のクローニング」の順にクリックします。
 - **Profitability and Cost Management のみ:** 「アプリケーション」、「環境のクローニング」の順にクリックします。

The screenshot shows a 'Clone Environment' form with the following elements:

- * Target URL:** A text input field with the placeholder 'Target Environment URL'.
- * Username:** A text input field with the placeholder 'User name with only Service Administrator role or both Service Administrator and Identity Domain Administrator roles'.
- * Password:** A text input field with the placeholder 'User password'.
- Options:** A row of checkboxes:
 - Users and Predefined Roles
 - Data Management
 - Application Audit
 - Job Console
 - Stored Snapshots and Files
- Additional Options:**
 - Daily Maintenance Start Time
 - Application Properties
- Footer:** Cloning Artifact Snapshot - Created: 20-Dec-2024 11:02:00

3. 「ターゲット URL」で、クローニング先の環境となる環境の URL を入力します(例: <https://testExample-idDomain.pbcs.us1.oraclecloud.com>)。
4. 「ユーザー名」に、アイデンティティ・ドメイン管理者の事前定義済役割も持っているサービス管理者のユーザー名を入力します。
Oracle Cloud Classic から OCI へのクローニングの場合は、ターゲット環境のサービス管理者とアイデンティティ・ドメイン管理者の事前定義済役割を持つユーザーのユーザー名を入力する必要があります。このユーザーは、アイデンティティ・ドメイン資格証明を使用してターゲット環境にログインする必要があります。
5. 「パスワード」で、「ユーザー名」に指定したユーザーのアイデンティティ・ドメイン・パスワードを入力します。
6. **オプション: 「ユーザー役割と事前定義済役割」** チェック・ボックスを選択し、ユーザーとその事前定義済役割割当てをクローニングします。

▲ Caution:

- ターゲット環境で、ユーザーのログイン名を変更しないでください(たとえば、ショート名 *jd* から電子メール ID *john.doe@example.com* への変更)。変更すると、既存のアクセス制御設定が無効になります。ソース環境とターゲット環境でユーザーのログイン名が確実に同じになるようにするために、このオプションを選択します。
- アイデンティティ・ドメイン管理者ではないユーザーが、このチェック・ボックスを選択した後で環境をクローニングすると、ユーザーおよびその事前定義済役割のインポートが失敗します。移行ステータス・レポートに、次のエラーが記録されます: 外部ディレクトリ・アーティファクト <artifact_name> のインポートに失敗しました。ユーザー <user_name> には、この操作を実行する権限はありません。ユーザーがこの操作を実行するには、アイデンティティ・ドメイン管理者役割が必要です。

重要な考慮事項:

- ユーザーをインポートせず、ソース・スナップショット内のユーザーがターゲット環境で事前定義済役割を持っていない場合、次のエラーが表示されます:
EPMIE-00070: 割り当てられた役割のインポート中にユーザーが見つかりませんでした。
- アイデンティティ・ドメイン管理者の役割のみが割り当てられたユーザーは、ターゲット環境にクローニングされません。ソース環境でアイデンティティ・ドメイン管理者の役割と事前定義済役割の組合せに割り当てられたユーザーはクローニングされますが、ターゲット環境ではそれぞれの事前定義済役割にのみ割り当てられます。これらのユーザーは、ターゲット環境ではアイデンティティ・ドメイン管理者の役割を持ちません。
- ソース環境が OCI (Gen 2) 環境であり、直接割り当てではなく IDCS グループを使用してユーザーに事前定義済役割が割り当てられている場合、IDCS グループはクローニングされませんが、クローニングされたユーザーには、ターゲット環境でこれらの事前定義済役割が直接割り当てられます。
- ユーザーの事前定義済役割に対する変更は、ソース・スナップショットで割り当てられている役割に基づいて更新されます。ただし、ソース・スナップショットの割り当てと一致させるためにターゲットの役割の割り当てが削除されることはありません。たとえば、jd さんがターゲット環境ではパワー・ユーザーという事前定義済役割に割り当てられているが、ソース・スナップショットではユーザー役割のみを持っているとします。この状況では、このコマンドによって、ターゲット環境で jd さんがユーザー役割に割り当てられますが、パワー・ユーザーの役割の割り当ては削除されません。
- このオプションでは、ターゲット環境に存在するユーザーは、ソース・スナップショットに存在しなくても削除されません。たとえば、jd さんにはターゲット環境にアカウントがありますが、ソース・スナップショットにはこのアカウントが存在しないとします。この状況では、ターゲット環境の jd さんのアカウントは削除されません。
- このオプションでは、ターゲット環境に存在しないユーザーは追加されます。ターゲット環境の現在のユーザー・プロパティは、ソース・スナップショットと異なる場合でも更新されません。たとえば、ソース・スナップショットの jd さんの姓のスペルがターゲット環境で異なる場合、ターゲット環境では変更は加えられません。
- このコマンドでは、ターゲット環境の既存のユーザーのパスワードがソース・スナップショットと異なる場合でも変更されません。

- ターゲット環境の新しいユーザーにはランダムなパスワードが割り当てられます。新しいユーザーは、パスワードの変更を求めるアカウントのアクティブ化の電子メールを受信します。
7. **オプション: Oracle Enterprise Data Management Cloud および Narrative Reporting 以外の環境のみ:** データ管理レコードをクローニングしない場合は、「**データ管理**」チェック・ボックスの選択を解除します。ステージング表に非常に多数のレコードが含まれている場合は、データ管理レコードのクローニングに長時間かかることがあります。データ管理レコードは、ソース環境とターゲット環境の両方が同じ月次更新の場合、またはターゲット環境がソース環境よりも1つ新しい更新である場合のみクローニングします。たとえば、22.01 のデータ管理レコードは、別の 22.01 環境または 22.02 環境のみにクローニングできます。
 8. **オプション: Planning、Planning モジュール、フリーフォーム、Financial Consolidation and Close、Tax Reporting および Enterprise Profitability and Cost Management のみ:** ジョブ・コンソール・レコードをクローニングしない場合は、「**ジョブ・コンソール**」チェック・ボックスの選択を解除します。
 9. **オプション: Planning、Planning モジュール、フリーフォームおよび Enterprise Profitability and Cost Management のみ:** アプリケーション監査レコードをクローニングしない場合は、「**アプリケーション監査**」チェック・ボックスの選択を解除します。

 **Note:**

Financial Consolidation and Close および Tax Reporting のアプリケーション監査データは、デフォルトでスナップショットに含まれます。

10. **オプション:** 受信ボックスと送信ボックスのコンテンツおよび保存されたスナップショットをクローニングする場合は、**保存されたスナップショットおよびファイル**・チェック・ボックスを選択します。このプロセスは、保存されたスナップショットの数とサイズ、および受信ボックスと送信ボックス内のファイルの数とサイズによっては長時間かかる場合があります。

 **Note:**

環境のクローニングでは、受信ボックスと送信ボックスに直接保存されているファイルのみがクローニングされます。受信ボックスと送信ボックス内のサブフォルダのファイルはクローニングされません。たとえば、受信ボックスに file1.csv および myfiles/file2.csv というファイルがある場合は、file1.csv のみがクローニングされます。

11. **オプション:** ターゲット環境の現在のメンテナンス開始時間を保持するには、「**DailyMaintenanceStartTime**」チェック・ボックスの選択を解除します。それ以外の場合、メンテナンス開始時間は、スナップショットのクローニング元であるソース環境の開始時間にリセットされます。
12. **オプション: Account Reconciliation のみ:** アプリケーション設定(レッドウッド・エクスペリエンス・テーマ、ビジネス・プロセス名、ロゴ・イメージおよび背景イメージ)をクローニングします。ターゲット環境でその現在のアプリケーション設定を保持するには、このチェック・ボックスの選択を解除します。

 **Note:**

他のすべてのアプリケーションでは、このチェック・ボックスは無効化(選択解除)されています。

13. 「クローン」をクリックすると、プロセスが開始されます。

環境のクローニング後に実行するタスク

ソース環境を今後使用しない場合は、クローニング・プロセスの完了後に、ソース環境に設定された URL、スクリプト、ブックマークなどがクローニングされた環境でシームレスに機能することを確認するために、いくつかのステップを実行する必要があります。

Cloud EPM ユーザーへの環境の URL の通知

サービス管理者は、Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management ユーザーに次のような環境の新しい URL を通知する必要があります:

- 環境にアクセスするための URL (管理者用スタート・ガイドの[サンプルの Cloud EPM URL](#)を参照)。
- 環境へのパブリックおよびプライベートの Oracle Smart View for Office 接続を確立するための URL

Oracle Cloud Classic から OCI へのクローニングでは、Cloud EPM ユーザーのユーザー名は、ソース環境のユーザー名と同じままです。

EPM 自動化スクリプトおよび REST API スクリプトの変更

クローニングされた環境に対して実行する予定の EPM 自動化スクリプトおよび REST API スクリプトを変更します。次の値を変更する必要があります:

- 環境の URL
- 環境のアイデンティティ・ドメイン(OCI 環境ではアイデンティティ・ドメインを指定する必要はありません。Oracle Cloud Classic 環境ではオプションです)。
- クローニングされた環境のパスワードが異なる場合はユーザーのパスワード。

タスク・マネージャ、補足データ・マネージャおよびエンタープライズ 仕訳カスタム・レポート問合せのオプションでの更新

必要に応じて、クローニングされた OCI 環境で、タスク・マネージャ、補足データ・マネージャおよびエンタープライズ 仕訳カスタム・レポート問合せ(存在する場合)を更新します。この更新は、タスク、仕訳、属性などのオブジェクトの内部 ID が移行中に変わる可能性があるため、必要になる場合があります。この更新は、クローニングされた Planning、Planning モジュール、Tax Reporting および Financial Consolidation and Close 環境に対して必要になる場合があります。

 **Note:**

Oracle 管理の移行によって内部オブジェクト ID が変更されることはありません。

Smart View の URL の更新

パブリック接続とプライベート接続の Smart View の URL を変更して、クローニングされた環境を指すようにします。接続 URL も必要に応じて更新します。次の情報ソースを参照してください。

- [管理者用スタート・ガイドの Smart View 接続の URL 構文](#)
- [Oracle Smart View for Office の使用の接続 URL マッピングの管理についておよび接続 URL マッピングの更新](#)

新しいバニティ URL の作成

ユーザーがバニティ URL を使用して環境に接続する場合は、新しいバニティ URL を作成するか、既存のバニティ URL を更新して、クローニングされた環境の URL を指すようにします。[管理者用スタート・ガイドのバニティ URL の使用](#)を参照してください。

ブックマークの変更

クローニングされた環境を指すようにブックマークを変更するようユーザーに通知します。

統合されたビジネス・プロセスの変更

統合されたビジネス・プロセス用に定義された接続を更新してナビゲーション・フローを変更し、クローニングされた環境をナビゲーション・フローに統合します。

Note:

統合されたビジネス・プロセス内の複数のインスタンスを新しいドメインに移動する場合は、すべてのインスタンスが移行されるまで、インスタンス間のシングル・サインオン(SSO)は機能しません。

SSO の設定

ユーザーを認証するために SSO を設定していて、移行の結果、使用中のアイデンティティ・ドメインが変更された場合は、SSO を再構成する必要があります。[管理者用スタート・ガイドのシングル・サインオンの構成](#)を参照してください。

Note:

クローニング前の前提条件として SSO を再構成した場合は、SSO の再構成は必要ありません。

IP 許可リストの再構成

次の条件では、setIPAllowlist EPM 自動化コマンドを使用して、OCI 環境の IP 許可リストを再構成する必要があります。[管理者用スタート・ガイドの安全なアクセスの設定](#)を参照してください:

- OCI 環境に移行する場合
- 「マイ・サービス」の「サービス詳細」画面で、Oracle Cloud Classic 環境の IP 許可リストを設定した場合

- クローニング前の前提条件として IP 許可リストを構成していないか、クローニング後に構成を変更する場合

統合エージェントの再構成

統合エージェントの構成を更新して、クローニングされた環境が適切に統合されていることを確認します。

他のサービスとの統合の更新

ソース環境が他のサービスと統合されていた場合は、統合設定を確認して、クローニングされた環境がそれらのサービスと適切に統合されていることを確認します。

IP アドレスの更新

次の場合は、新しい IP アドレスで構成を更新します:

- ソース Cloud EPM 環境の IP アドレスを任意の場所で使用している場合(たとえば、許可された送信 IP アドレスとしてプロキシ構成に追加している場合)。この場合は、nslookup または ping を使用してターゲット環境の IP アドレスを見つけ、更新します。
- クラシックから OCI 環境に移行していて、他の環境(Fusion ERP 環境など)の許可リストにクラシック・データ・センターのアウトバウンド IP アドレスを追加している場合。この場合は、IP アドレスを新しい OCI リージョンのアウトバウンド IP アドレスに変更します。ご使用の環境の OCI リージョンのアウトバウンド IP アドレスを取得するには、オペレーション・ガイドの Cloud EPM のデータ・センターおよびリージョンのアウトバウンド IP アドレスを参照してください。

4

オンプレミス・アプリケーションの Cloud EPM への移行

この項の情報をを使用して、オンプレミス Oracle Enterprise Performance Management System アプリケーションを Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management 環境に移行します。

- 前提条件とノート
- プロセス・フロー
 - ステップ 1: セキュリティ・モデルの移行
 - ステップ 2: オンプレミス・デプロイメントから Cloud EPM へのアーティファクトの移行
 - * Planning から Planning への移行
 - * Financial Consolidation and Close への Financial Management の移行
 - * Account Reconciliation への Financial Close Management の移行
 - * Profitability and Cost Management へのオンプレミスの Profitability and Cost Management の移行
 - * Strategic Modeling への Strategic Finance の移行
 - * Data Relationship Management から Oracle Enterprise Data Management Cloud への移行
 - FDMEE ベースのアプリケーションの移行に関する考慮事項

現在の環境に移行できる Cloud EPM アプリケーション・スナップショットの詳細は、*管理者用 スタート・ガイド*の EPM Standard Cloud Service および EPM Enterprise Cloud Service に移行可能なアプリケーション を参照してください。

前提条件とノート

Oracle Enterprise Performance Management System アプリケーションを Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management 環境に移行する前に考慮が必要な要素を示します。

- 一般的な前提条件
- デフォルト・アプリケーション・プロパティ
- 必要な役割
- サポートされていないアーティファクト
- サポートされていないモジュールおよびアプリケーション
- 予約語

一般的な前提条件

Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management に移行する前に、オンプレミス・アプリケーションが安定していることを確認してください。

たとえば、Planning アプリケーションで無効なルールが使用されていたり、キューブ・リフレッシュ・エラーがあってはなりません。

デフォルト・アプリケーション・プロパティ

オンプレミス環境でのデフォルト・アプリケーション・プロパティへの変更は無視されます。

インポート時にすべてのアプリケーション・プロパティはプリセット値にデフォルト設定されます。たとえば、ORACLE_ADF_UI、sync_on_logon、JDBC/OLAP min/max connections および edit_dim_enabled です。

必要な役割

移行タスクを実行できるのは、管理者アクセス権限を持つユーザーのみです。

- Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management では、移行関連のすべての操作について、実行するユーザーに「サービス管理者」事前定義済役割が必要です。

例外: Cloud EPM サービスをサポートするアイデンティティ・ドメインにユーザーを作成できるのは、アイデンティティ・ドメイン管理者のみです。

管理者用スタート・ガイドの事前定義済役割の理解を参照してください。

- オンプレミス環境で、移行関連の操作を実行するユーザーには次の役割が必要です。
 - Shared Services 管理者
 - 移行中のアプリケーションの管理者役割
- アプリケーションの移行先の Cloud EPM 環境にアプリケーション(サンプル・アプリケーションを含む)およびデータがまだ含まれていない必要があります。

サポートされていないアーティファクト

一部のアーティファクトはオンプレミス環境から Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management に移行できません。

次の移行はサポートされていません。

- Shared Services のカスタム役割
- Oracle Hyperion Reporting and Analysis の注釈およびバッチ・ジョブ

ノート:

Financial Reports に対して定義された ACL は移行中に失われ、Planning で手動で定義する必要があります。

- 「全般プリファレンス」など、Reporting and Analysis で保存されたプリファレンス

- **Essbase グローバル代替変数**
アプリケーションにグローバル代替変数がある場合、移行する前にアプリケーション固有の変数に変換してください。代替変数エディタを開いて「アプリケーション」列の値を「すべてのアプリケーション」から特定のアプリケーションに変更することで、このタスクを Oracle Essbase Administration Services で実行します。
- **Essbase キューブのパーティション定義**
- **Essbase 構成ファイルに指定されているカスタム設定(キューブのキャッシュ設定など)**
- **リンク・レポート・オブジェクト**
- **ホーム・ページなど、個人用ページとワークスペース・ページ**
- **Interactive Reporting ドキュメントや Web Analysis ドキュメントなど、カスタム MIME タイプのオブジェクトとサポートされなくなった MIME タイプのオブジェクト**
- **Essbase レポート・スクリプトやルール(RUL)のファイル**
- **計算スクリプト**

サポートされていないモジュールおよびアプリケーション

一部のオンプレミス・アプリケーション・モジュールは、Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management に移行できません。

次のモジュールおよびアプリケーションは Cloud EPM に移行できません。

- Oracle Workforce Planning、Oracle Hyperion Capital Asset Planning、Oracle Project Financial Planning および Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting などの水平プランニング・モジュール。これらのアプリケーションの Planning への移行は、Planning モジュール・キューブをそこから削除した場合でも、ビジネス・ルールおよびフォームがキューブを網羅するため、失敗します。
- Oracle Hyperion EPM Architect 対応の Planning アプリケーション。
- Enterprise Resource Planning Integrator

予約語

一部の語は Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management で予約語と見なされません。予約語(例: 操作、勘定科目タイプ、集約、説明など)がオンプレミス・アプリケーションで使用されていないことを確認してください。

Planning

Planning アプリケーションを移行する前に、アプリケーション内のディメンション、属性および別名が、Planning のディメンション・プロパティの内部使用のための予約語と競合しないことを確認します。別名が予約語と競合する場合、Planning アプリケーションのインポートは失敗する可能性があります。命名規則を参照してください。

プロセス・フロー

オンプレミス・アプリケーションの Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management への移行には、セキュリティの移行とアプリケーションの移行という 2 つの広範なステップを伴います。

セキュリティ・モデルの移行手順はすべての移行で同様です。アプリケーション・アーティファクトの移行ステップはアプリケーションによって異なるため、それぞれの移行シナリオについては別のセクションで説明します。

- ステップ1: セキュリティ・モデルの移行
- ステップ2: オンプレミス・デプロイメントから Cloud EPM へのアーティファクトの移行
 - Planning から Planning への移行
 - Financial Consolidation and Close への Financial Management の移行
 - Account Reconciliation への Financial Close Management の移行
 - Profitability and Cost Management へのオンプレミスの Profitability and Cost Management の移行
 - Enterprise Profitability and Cost Management へのオンプレミスの管理元帳アプリケーションの移行
 - Data Relationship Management から Oracle Enterprise Data Management Cloud への移行
- FDMEE ベースのアプリケーションの移行に関する考慮事項

ステップ1: セキュリティ・モデルの移行

セキュリティ・モデルの移行には、アイデンティティ・ドメイン・ユーザーの作成および役割への割当てが伴います。アイデンティティ・ドメイン管理者が Oracle Identity Management コンソールを使用してユーザーを作成し、サービス管理者がユーザーをロールに割り当てます。

さらに、オンプレミス・アプリケーションでアプリケーション・アーティファクトへのアクセス制御の付与の設定にグループが使用される場合、アクセス制御を使用して Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management 環境でグループを作成する必要があります。

このセクションではオンプレミス・ユーザーを識別し、アイデンティティ・ドメインのユーザー・アカウントを各ユーザーに作成して、事前定義済役割に割り当てる方法を説明します。

ノート:

この項の情報は、次のオンプレミスから Cloud EPM への移行に適用されます。

- Planning から Planning
- Oracle Hyperion Financial Management から Financial Consolidation and Close
- Oracle Hyperion Financial Close Management から Account Reconciliation
- Profitability and Cost Management から Profitability and Cost Management
- Oracle Data Relationship Management から Oracle Fusion Cloud Enterprise Data Management への移行

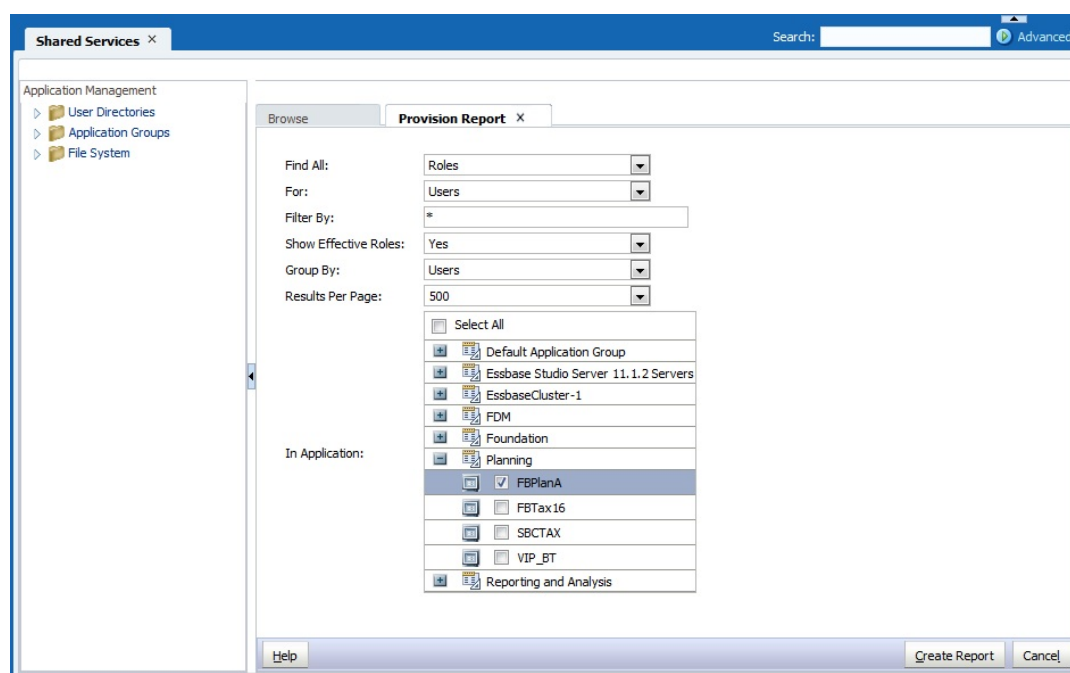
オンプレミス・ユーザーおよびグループの識別

移行対象のオンプレミス・アプリケーションおよび関連コンポーネント(Shared Services、Calculation Manager、FDM/Financial Data Quality Management、Enterprise Edition、Oracle

Hyperion Reporting and Analysis など)へのアクセス権を持つユーザーを識別する、プロビジョニング・レポートを生成することによって開始します。

オンプレミス Oracle Enterprise Performance Management System のユーザーおよびグループを識別するには:

1. オンプレミス・デプロイメントで管理者としてログインします。
2. 「ナビゲート」、「管理」、「Shared Services Console」の順に選択します。
3. プロビジョニングされたユーザーを一覧表示するレポートを生成します。



- a. 「管理」、「プロビジョニング・レポートの表示」の順に選択します。
- b. 「すべて検索」で、「役割」を選択します。
- c. 「対象」で、「ユーザー」を選択します。
- d. 「有効な役割の表示」で、「はい」を選択します。
- e. 「グループ化基準」で、「ユーザー」を選択します。
- f. 「アプリケーション」で次のように選択します。

ノート:

移行するアプリケーションをサポートしている Oracle Enterprise Performance Management System のコンポーネントをすべて選択してください。

- **Foundation:** Shared Services
- **Reporting and Analysis:** Reporting and Analysis
- **FDM:** FDM Enterprise Edition および ERP Integrator (存在する場合)

- 移行するアプリケーション。たとえば、**Planning** アプリケーションを移行する場合は、「**Planning**」を展開して、移行するアプリケーションを選択します。複数のアプリケーションを選択しないでください。
4. 「**レポート作成**」をクリックします。
 5. 「**CSVにエクスポート**」をクリックして、レポートのカンマ区切り値(CSV)ファイルを作成します。このレポートを安全なディレクトリに保存します。

セキュリティ・アップロード・ファイルの作成

リファレンスとして生成したプロビジョニング・レポートを使用して、ユーザー、グループおよび役割のアップロード(CSV)ファイルを作成します(オンプレミス・ユーザーおよびグループの識別を参照)。セキュリティ・アップロード・ファイルによって、アイデンティティ・ドメインへのユーザーのバルク・ロード、事前定義済役割へのユーザーの割当て、アクセス制御でのグループの作成、および Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management でのアクセス権の割当てが容易になります。

ユーザー・アップロード・ファイルの作成

ユーザー・アップロード・ファイル(users.csv など)を作成することで、オンプレミス・ユーザーをアイデンティティ・ドメイン内にロードして Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management ユーザーを作成します。

サービスへのアクセスを許可するユーザーを識別するために生成したプロビジョニング・レポートを使用します。オンプレミス・アプリケーションのプロビジョニングされたすべてのユーザーを、アイデンティティ・ドメインのユーザーとして作成する必要があります。

2人のユーザーをロードするサンプル・ユーザー・アップロード・ファイルのコンテンツ:

```
First Name,Last Name,Email,User Login
John,Doe,john.doe@example.com,jdoe
Jane,Doe,jane.doe@example.com,jndoe@example.com
```

ノート:

「User Login」はオプションです。ユーザー名として電子メール・アドレスを使用する場合は除外できます。

ユーザー・アップロード・ファイルを作成するには:

1. テキスト・エディタを使用して CSV ファイル(例: users.csv)を作成し、それを便利な場所に格納します。ファイルを All Files (*.*)タイプとして保存してください。
2. ユーザー・アップロード・ファイルを編集します。
 - a. ファイル・ヘッダーとして次のように入力します。

```
First Name,Last Name,Email,User Login
```

- b. ユーザーの詳細をユーザーごとに1行、追加します。各エントリはカンマを使用して区切ります。例:

```
John,Doe,john.doe@example.com,jdoe
```

ノート:

電子メール・アドレスは一意である必要があります。

3. ユーザー・アップロード・ファイルを保存して閉じます。

グループ・アップロード・ファイルの作成

オンプレミス環境から、ネイティブ・ディレクトリのグループ情報をエクスポートして Groups.csv ファイルを作成します。

アプリケーションのアーティファクトへのアクセス権の付与に使用されるグループは、プロビジョニング・レポートの「**継承情報**」列で識別されます。[オンプレミス・ユーザーおよびグループの識別](#)を参照してください。この列の情報をガイドとして使用することで、Groups.csv を編集して、オンプレミス環境でアーティファクトへのアクセス権の付与に使用されていないグループを削除します。

生成された Groups.csv ファイルには、オンプレミス環境でアーティファクトへのアクセス権の付与に使用した外部ディレクトリのグループに関する情報が含まれていません。このグループに関する情報を Groups.csv 内に追加する必要があります。

次は、plan_grp1 および子グループ plan_grp9 の2つのグループとユーザー・メンバー jdoe をロードする、サンプルの Groups.csv ファイルです。

```
#group
id,provider,name,description,internalid
plan_grp1,Native Directory,plan_grp1, ,
plan_grp9,Native Directory,Plan_grp9, ,

#group_children (user members of group)
id,group_id,group_provider,user_id,user_provider
Plan_grp1, , ,jdoe,Native Directory

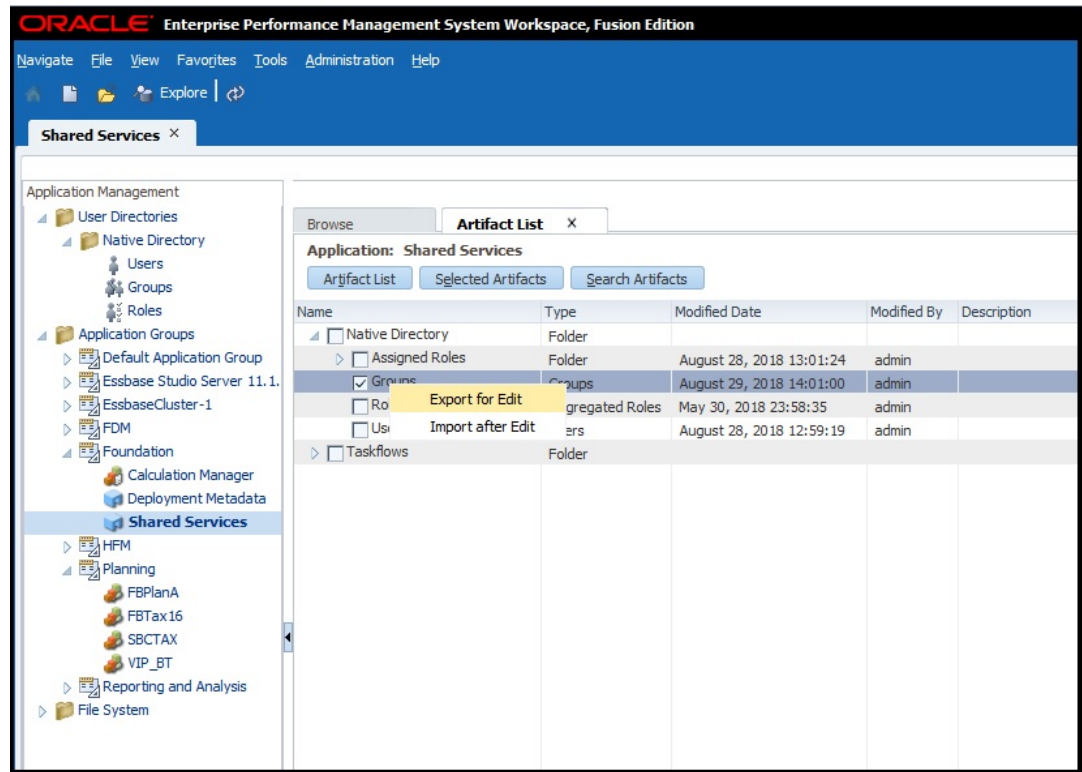
#group_children (group members of group)
id,group_id,group_provider,user_id,user_provider
plan_grp9,plan_grp1,Native Directory, , ,
```

ノート:

アクセス制御を使用してクラウド環境にグループを作成するには、Groups.csv ファイルを使用します。これらのグループを使用して、オンプレミス・アプリケーションに存在するグループと同様の、アーティファクトへのアクセス制御を再作成します。

Groups.csv を作成するには:

1. オンプレミス・デプロイメントで Shared Service 管理者としてログインします。
2. 「ナビゲート」、「管理」、「Shared Services Console」の順に選択します。
3. ビュー・ペインで、「アプリケーション・グループ」、「Foundation」を展開して、「Shared Services」を選択します。
4. 「グループ」を右クリックし、「編集用にエクスポート」を選択します。



5. Groups.csv を選択します。
6. Groups.csv を編集します。
 - a. テキスト・エディタを使用して、保存した場所から Groups.csv を開きます。
 - b. 移行するアプリケーションに属しているアーティファクトへのアクセス制御に使用されないグループの情報を削除します。
 - c. 移行するアプリケーションに属しているアーティファクトへのアクセス制御に使用される外部グループに関する情報(プロビジョニング・レポートの「継承情報」列を参照)を追加します。
 - d. Groups.csv を保存して閉じます。

役割アップロード・ファイルの作成

オンプレミス環境の役割と同等のものが Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management にはありません。また、アイデンティティ・ドメインはグループに対応していないので、事前定義済役割に割り当てることができるのはユーザーのみです。

Oracle Fusion Cloud Enterprise Data Management 以外のサービスでは、4 つの役割アップロード・ファイルを事前定義済役割ごとに 1 つずつ使用して、役割を各ユーザー・タイプに割り当てます。Oracle Enterprise Data Management Cloud には 2 つのアップロード・ファイルのみ必

要です。これらのアップロード・ファイルをプロビジョニング・レポート([オンプレミス・ユーザーおよびグループの識別](#)を参照)を使用して手動で作成して、ユーザーがオンプレミス・アプリケーションで保有するものに類似したアクセス権を付与する事前定義済役割を識別する必要があります。オンプレミスから Cloud EPM への役割マッピングについては、次のトピックを参照してください。

- [Planning](#)
- [Financial Management](#)
- [Financial Close Management](#)
- [Profitability and Cost Management](#) および [Enterprise Profitability and Cost Management](#)
- [Data Relationship Management](#)

[管理者用スタート・ガイド](#)の1つの役割の多数のユーザーへの割当てを参照してください。

役割アップロード・ファイルを作成するには:

1. テキスト・エディタを使用して CSV ファイル(例: power_user_role.csv)を作成し、それを便利な場所に格納します。ファイルを All Files (*.*)タイプとして保存してください。
2. ファイルを編集します。
 - a. 「User Login」をファイル・ヘッダーとして入力します。
 - b. 事前定義済役割を付与する必要があるユーザーごとに電子メール・アドレスを入力します。

たとえば、「パワー・ユーザー」役割を John Doe および Jane Doe というユーザーに割り当てる場合、アップロード・ファイルの内容は次のようになります。

```
User Login  
  
jane.doe@example.com  
  
john.doe@example.com
```
3. ファイルを保存して閉じます。
4. この手順を繰り返して、その他の事前定義済役割のアップロード・ファイルを作成します。

サービスへのファイルのアップロード

セキュリティを移行する前に、サービス管理者がオンプレミス・アプリケーションの移行先である Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management 環境に次のファイルをアップロードする必要があります。

- [ユーザー・アップロード・ファイル](#)。[ユーザー・アップロード・ファイルの作成](#)を参照してください
- [役割アップロード・ファイル](#)。[役割アップロード・ファイルの作成](#)を参照してください

uploadFile EPM 自動化コマンドを使用して、ファイルをアップロードします。

次の手順では、これらのファイルが Oracle/EPM Automate/bin フォルダに格納されていることを前提としています。

EPM 自動化の使用の詳細は、[EPM 自動化の操作](#)で次の項を参照してください:

- 「EPM 自動化」コマンドの実行について
- 「EPM 自動化」の実行

- 「EPM 自動化」コマンド

Cloud EPM 環境にファイルをアップロードするには:

1. コマンド・プロンプト(Windows の場合)またはターミナル・ウィンドウ(Linux の場合)を開き、「EPM 自動化」をインストールしたディレクトリ、通常は C:\Oracle\EPM Automate\bin フォルダ(Windows コンピュータの場合)に移動します。

2. 次のようなコマンドを使用し、サービス管理者としてサインインします。

```
epmautomate login example_admin example_password/password_file example_url
```

3. ユーザーと役割のアップロード・ファイルを1つずつアップロードします。次のコマンドを使用します。

```
epmautomate uploadfile FILE_NAME
```

4. listFiles コマンドを使用して、アップロードしたファイルが Cloud EPM 環境で使用できることを確認します。

```
epmautomate listfiles
```

5. サインアウトします。

```
epmautomate logout
```

Cloud EPM でのステップ

- [アイデンティティ・ドメインでのユーザーの作成](#)
- [事前定義役割へのユーザーの割当て](#)
- [アクセス制御へのグループのインポート](#)

これらの手順では、「EPM 自動化」を使用してタスクを実行します。ツールの使用方法の詳細は、[EPM 自動化の操作を参照してください](#)。

- 「EPM 自動化」コマンドの実行について
- 「EPM 自動化」の実行
- 「EPM 自動化」コマンド

アイデンティティ・ドメインでのユーザーの作成

このステップでは、アイデンティティ・ドメイン管理者がユーザー・アップロード・ファイルを使用して、アイデンティティ・ドメインのユーザーを作成します。

アイデンティティ・ドメインのユーザーを作成するには:

1. コマンド・プロンプト(Windows の場合)またはターミナル・ウィンドウ(Linux の場合)を開き、「EPM 自動化」をインストールしたディレクトリ、通常は C:\Oracle\EPM Automate\bin フォルダ(Windows コンピュータの場合)に移動します。

2. 次のようなコマンドを使用し、アイデンティティ・ドメイン管理者としてサインインします。

```
epmautomate login example_domain_admin example_password/password_file  
example_url
```

3. addUsers コマンドを使用して、ユーザー・アップロード・ファイルの情報を使用してアイデンティティ・ドメイン・ユーザーを作成します。コマンド形式は次のようになります

```
epmautomate addUsers file_name.CSV userPassword=ExamplePwdl resetPassword=true
```

事前定義役割へのユーザーの割当て

この手順では、アイデンティティ・ドメイン管理者またはサービス管理者が役割アップロード・ファイルを使用してユーザーを事前定義済役割に割り当てます。ユーザーはアイデンティティ・ドメインを共有している複数の環境にわたって共通ですが、役割割当てでは1つの環境に固有です。

ユーザーを事前定義済のアイデンティティ・ドメイン役割に割り当てるには:

1. コマンド・プロンプト(Windows の場合)またはターミナル・ウィンドウ(Linux の場合)を開き、「EPM 自動化」をインストールしたディレクトリ、通常は C:\Oracle\EPM Automate\bin フォルダ(Windows コンピュータの場合)に移動します。
2. アイデンティティ・ドメイン管理者、またはユーザーを事前定義済役割に割り当てる環境のサービス管理者としてサインインします。次のようなコマンドを使用します。

```
epmautomate login example_admin example_password/password_file example_url  
example_identitydomain
```

3. 役割アップロード・ファイルの情報を使用して、アイデンティティ・ドメイン・ユーザーを事前定義済役割に割り当てます。次のようなコマンドを使用します。

```
epmautomate assignRole file_name.CSV role_name
```


使用可能な役割名は次のとおりです。

- サービス管理者
 - パワー・ユーザー(Oracle Fusion Cloud Enterprise Data Management には適用されません)
 - ユーザー
 - 参照者(Oracle Enterprise Data Management Cloud には適用されません)
4. 前の手順を繰り返し、残りの役割アップロード・ファイルに基づいて、ユーザーを事前定義済役割に割り当てます。

アクセス制御へのグループのインポート

このステップでは、前に作成した Groups.CSV ファイルを使用して、サービス管理者がグループをアクセス制御にインポートします。[グループ・アップロード・ファイルの作成](#)を参照してください。

グループをインポートするには:

1. ブラウザからサービス管理者としてサービスにアクセスします。
2.  (ナビゲータ)、「**アクセス制御**」の順にクリックします。
3. 「**ユーザー・グループ・レポート**」をクリックします。
4. 「**CSV からインポート**」をクリックします。
5. 「**ユーザー・グループ割当 CSV のインポート**」で「**参照**」を使用し、Groups.CSV を探して選択します。
6. 「**インポート**」をクリックし、「**はい**」をクリックして確認ダイアログ・ボックスを確認します。

インポート・プロセスが完了すると、処理された割当の合計数およびステータスを示す確認ダイアログ・ボックスが表示されます。

ステップ2: オンプレミス・デプロイメントから Cloud EPM へのアーティファクトの移行

オンプレミス・アプリケーション・アーティファクトの Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management への移行は、移行対象のアプリケーションによって異なります。

適切なアプリケーション固有のトピックを使用してオンプレミス環境からアーティファクトをエクスポートし、移行プロセスを完了します。

- [Planning から Planning への移行](#)
- [Financial Consolidation and Close への Financial Management の移行](#)
- [Account Reconciliation への Financial Close Management の移行](#)
- [Profitability and Cost Management へのオンプレミスの Profitability and Cost Management の移行](#)
- [Enterprise Profitability and Cost Management へのオンプレミスの管理元帳アプリケーションの移行](#)
- [Data Relationship Management から Oracle Enterprise Data Management Cloud への移行](#)

▲ 注意:

Windows では、ピリオド(.)で終わるフォルダ名およびファイル名は許可されません。オンプレミス環境のアーティファクト名がピリオドで終わる場合(example_Ltd. という名前の Financial Reporting フォルダなど)、アーティファクトを Windows コンピュータにエクスポートしてエクスポート・アーカイブを作成すると、Cloud EPM へのインポート中にエラーおよび警告が発生する可能性があります。これは、Windows オペレーティング・システムによってアーティファクト名から終了ピリオドが自動的に削除されることにより、XML 記述子ファイル内のアーティファクト名とアーカイブのコンテンツ内のアーティファクト名で名前の不一致が生じるためです。

回避策: 7-Zip などのソフトウェアを使用して、アーカイブのアーティファクト名を編集して終了ピリオドを含めます。

Planning から Planning への移行

- サポートされている移行パス
- [Planning アーティファクトのエクスポート](#)
- [エクスポートしたアーティファクトの圧縮と Cloud EPM 環境へのアップロード](#)
- [Planning アーティファクトのインポート](#)
- [検証とトラブルシューティング](#)
- [Essbase アーティファクトの移行](#)

サポートされている移行パス

オンプレミス Planning

クラウドに移行するオンプレミス・インスタンスに、使用可能な最新のパッチが適用されている必要があります。

次のリリースのオンプレミス Planning アプリケーションを Planning に移行できます。

- リリース 11.1.2.3
- リリース 11.1.2.4
- 11.2.x のリリース

ノート:

Oracle Essbase 21c を使用するオンプレミス 11.2.x Planning アプリケーションは、Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management に移行できません。

リリース 11.1.2.1 のオンプレミス Planning アプリケーションの移行に関する情報は、リリース 11.1.2.1 のオンプレミス Planning アプリケーションの *Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management Planning* への移行を参照してください。このドキュメントは、<https://support.oracle.com> の Oracle サポートから入手できます。

Cloud EPM 移行パス

オンプレミス Planning アプリケーションを EPM Enterprise Cloud Service カスタム・アプリケーションに移行できます。

オンプレミス Planning モジュール・アプリケーション(要員、戦略モデリングなど)は、Cloud EPM に移行できません。

Planning アーティファクトのエクスポート

Planning アプリケーションをエクスポートする前に、プラン・タイプ名がキューブ名と同じであることを確認してください。同じでない場合は、Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management の移行された Planning アプリケーションでのアプリケーション間データ・マップ作成は失敗します。

オンプレミス・デプロイメントからアーティファクトをエクスポートするには:

1. オンプレミス・デプロイメントで Shared Services 管理者としてログインします。
このユーザーは、**Calculation Manager**、**Reporting and Analysis** および移行するアプリケーションの管理者の役割でプロビジョニングする必要があります。
2. 「ナビゲート」、「管理」、「Shared Services Console」の順に選択します。
3. エクスポート中の Planning アプリケーションがルール・エンジンとして Calculation Manager を使用している場合:
 - a. 左ペインで、「アプリケーション・グループ」、「Foundation」の順に展開してから、**Calculation Manager** アプリケーションを選択します。
 - b. 右ペインで、「Planning」を展開してから、移行する Planning アプリケーションを選択します。アプリケーションのすべてのアーティファクト(「構成」、「Essbase データ」、

「グローバル・アーティファクト」、「プラン・タイプ」、「リレーショナル・データ」、「セキュリティ」が選択されていることを確認します。

4. 左ペインで、**Reporting and Analysis** を展開してから、**Reporting and Analysis** アプリケーションを選択します。
5. 右ペインで、**リポジトリ・オブジェクト**を展開してから、次の操作を行います。
 - **Planning** アプリケーションに関連付けられたすべての **Financial Reporting** オブジェクトを選択します。
スナップショット・レポートとスナップショット・ブックはアプリケーションに関連付ける必要はありません。
 - 任意のサード・パーティのコンテンツ(ドキュメントや HTML ファイルなど)を選択します。
 - **HRInternalFolder** を展開してから次の操作を行います。
 - **DataSources** を選択します。
 - **UserPOV** を展開します。
ユーザーとデータ・ソースの組合せごとに **UserPOV** が存在します。セキュリティ・モデル移行の一環として移行されたユーザーに対する **UserPOV** を選択します。
たとえば、オンプレミス環境からセキュリティ・モデルを **Planning** に移行した後、**Planning** で **Henry** がアクティブなユーザーである場合、アーティファクト名に **Henry** を持つ **UserPOV** をすべて選択します。
6. 「**セキュリティ**」を選択します。
7. すべての **Planning** アーティファクトを選択します。
 - a. 左ペインで、「**アプリケーション・グループ**」、「**Planning**」の順に展開します。
 - b. 右ペインで、すべてのアーティファクトを選択します。
8. 「**エクスポート**」をクリックします。
9. 「**ファイル・システムにエクスポート**」で、Oracle Hyperion Foundation Services がインストールされているコンピュータ上のディレクトリ(デフォルト・ディレクトリは `MIDDLEWARE_HOME/user_projects/epmsystem1/import_export/admin@native directory`)を入力します。
10. 「**エクスポート**」をクリックします。
移行ステータス・レポートが表示されます。レポートを調べて、すべてのアーティファクトがエラーなしで移行されていることを確認します。エクスポートに失敗する場合は、報告されたエラーを修正して再試行します。

エクスポートしたアーティファクトの圧縮と Cloud EPM 環境へのアップロード

オンプレミス環境のアーティファクトに **Unicode** 文字が含まれている場合、**Unicode** 文字がファイル・システムに正しく表示される環境からアーティファクトが圧縮されていることを確認してください。ファイル・システム内のアーティファクトが文字化けして表示される場合、アーティファクトの **Planning** へのインポートは失敗します。

 ノート:

次のステップはオンプレミス Windows 環境に適用されます。他のプラットフォームに対しても同様のステップを実行できます。

アーティファクトを圧縮し、ZIP ファイルをサービス・インスタンスにアップロードするには:

1. **Foundation Services** がインストールされているコンピュータで、エクスポートしたアーティファクトが格納されているファイル・システム・フォルダに移動します。

デフォルトのエクスポート先は `MIDDLEWARE_HOME/user_projects/epmsystem1/import_export/admin@native` directory です。

2. ファイル・システム・フォルダにエクスポートされたフォルダをすべて選択し、7-Zip などのサードパーティ製ソフトウェアを使用してコンテンツを圧縮します。

- a. エクスポートされたフォルダを右クリックし、7-Zip を選択してから **「Add to Archive」** を選択します。
- b. **「Add to Archive」** で、選択したフォルダを右クリックして次の情報を設定します。
 - **「Archive」** でアーカイブの名前を **OnPremisesApplication** に変更します。
 - **「Archive Format」** で、**「Zip」** を選択します。
 - **「Parameters」** に `「cu=on」` と入力し、Unicode パスとファイル名を保持します。
- c. **「OK」** をクリックします。

3. `uploadFile` EPM 自動化コマンドを使用して、ZIP ファイルを Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management 環境にアップロードします。次のコマンド・シーケンスを使用して、ファイルをアップロードします。

```
epmautomate login example_admin example_password/password_file example_url
epmautomate uploadfile OnPremisesApplication.ZIP
```

アップロード・プロセスが完了するのに数分かかることがあります。

移行を使用してアップロードすることもできます。[サービスへのアーカイブのアップロード](#)を参照してください。

Planning アーティファクトのインポート

 ノート:

Planning 環境で使用できる Planning アプリケーションは 1 つのみです。アーティファクトをインポートする前に、環境から既存のアプリケーションを削除します。アプリケーションの削除の詳細は、*Planning の管理*のアプリケーションの削除を参照してください。


サービス管理者は、次の方法を使用してアーティファクトをインポートできます。

- `importSnapshot` EPM 自動化コマンドを使用します。次のコマンド・シーケンスを使用して環境にサインインし、スナップショットをインポートします。

```
epmautomate login example_admin example_password/password_file example_url
epmautomate importSnapshot OnPremisesApplication
```

- 「移行」を使用します。

「移行」を使用して環境にアーティファクトをインポートするには:

1. ブラウザから **Planning** 環境にサービス管理者としてサインインします。
2.  (ナビゲータ)、「**移行**」の順にクリックします。
3. 「**スナップショット**」をクリックします。
4. アップロードしたスナップショット(OnPremiseApplication など)の行で **...**(「アクション」)をクリックして、「**インポート**」を選択します。
5. 「**インポート**」で「**OK**」をクリックします。

移行ステータス・レポートが表示されます。移行が完了するまでレポートをリフレッシュします。

検証とトラブルシューティング

インポート中に移行ステータス・レポートをチェックして、**Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management** 環境へのインポートにエラーが発生していないことを確認します。エラーが報告された場合は、修正処理を実行してからアーティファクトを再インポートします。

Planning の移行に成功したことを確認するには、**Planning** で次のチェックを実行します:

- **Essbase** データが正しく移行されていることを確認します。
- **Planning** データ・フォームを開いて、ソース環境からのデータ・フォームと比較します。
- ドライバ・データが含まれるデータ・フォームを開いて、ソース環境からのデータ・フォームと比較します。
- ディメンションおよびタスク・リストが移行されていることを確認します。ディメンションが存在して正しいメンバーを含んでいることを確認します。
- アプリケーションに関連付けられた **Financial Reporting** レポートを表示できることを確認します。

Essbase アーティファクトの移行

オンプレミス **Planning** アプリケーションにデプロイされている代替変数とルールは、他のアーティファクトとともに移行されます。

次のアーティファクトが **Oracle Essbase** に直接追加された場合は、それらを **Planning** に手動で再作成する必要があります。

- **Essbase** 計算スクリプト。 [計算スクリプトの移行](#)を参照してください
- **Essbase** レポート・スクリプト。 [レポート・スクリプトの移行](#)を参照してください
- **Essbase** データ・ルール・ファイル。 [データ・ロード・ルール・ファイルの移行](#)を参照してください

これらのアーティファクトは **Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management** に移行できません。

- **Essbase** キューブ間のパーティション定義

- Essbase 構成ファイルに指定されているカスタム設定(キューブのキャッシュ設定など)
- リンクされたレポート・オブジェクト

計算スクリプトの移行

この項は、Oracle Essbase に直接作成された計算スクリプトがオンプレミス・アプリケーションで使用されている場合にのみ適用されます。

オンプレミスの Essbase アプリケーションから計算スクリプトをエクスポートし、Planning でビジネス・ルールの作成中にそれを参照として使用します。

Calculation Manager での設計のビジネス・ルールの作成を参照してください。

オンプレミスの計算スクリプトをビジネス・ルールとして再作成するには:

1. ブラウザから Planning 環境にサービス管理者としてサインインします。
2. ナビゲータで、「作成および管理」の下にある「ルール」をクリックします。
「Calculation Manager」が開きます。
3. 「Planning」を展開して、ルールを作成する対象のアプリケーション、キューブの順に選択します。
4. 「ルール」を右クリックしてから、「新規」を選択します。
5. 「新規ルール」にルール名を入力します(この名前は、ルールとして再作成するスクリプトの名前と一致する必要があります)。
6. オンプレミス Essbase スクリプトから、スクリプトの内容をコピーします。
7. スクリプト・エディタにスクリプトの内容を貼り付けます。
8. 「保存」をクリックします。
9. 新規ルールを Planning にデプロイします。

レポート・スクリプトの移行

Oracle Essbase からデータをエクスポートするには、レポート・スクリプトを使用します。既存のオンプレミス Essbase レポート・スクリプトは Oracle Smart View for Office のスマート・クエリーに変換でき、これを使用してアドホック・レポートの作成や分析を行うことができます。

ノート:

詳細は、*Oracle Smart View for Office* の使用のスマート・クエリーの作成を参照してください

Essbase レポート・スクリプトのかわりにスマート・クエリーを作成する場合のステップ概要:

- レポート・スクリプトの<ROW で参照されているメンバーを、クエリーの行レイアウトに移行します
- レポート・スクリプトの<COLUMN の下のメンバー選択を、クエリーの列レイアウトに移行します
- レポート・スクリプトの<PAGE にある POV メンバーを、クエリーで選択します

- レポート・スクリプト内に抑制オプション(SUPMISSINGROWS、SUPEMPTYROWS など)がある場合は、「**詳細設定オプション**」メニューの「**オプション**」を使用してその抑制オプションを指定します。
- Microsoft Excel で使用可能な SmartView のデータ・フォーマット、セル・スタイルまたはセル・フォーマットの各オプションを使用して、レポート・スクリプトのデータ・フォーマット・オプションを適用します。

データ・ロード・ルール・ファイルの移行

Oracle Essbase ルール・スクリプトを Data Management のデータ・ロード・マッピングに変換します。

データ統合の管理のファイルベース統合の作成を参照してください。

Financial Consolidation and Close への Financial Management の移行

- サポートされている移行パス
- Financial Management のメタデータおよびアーティファクトの移行

サポートされている移行パス

Cloud EPM 移行アクセラレータを使用して移行プロセスを完了します。

オンプレミス Financial Management

クラウドに移行するオンプレミス・インスタンスに、使用可能な最新のパッチが適用されている必要があります。

次のリリースの Oracle Hyperion Financial Management アプリケーションを Financial Consolidation and Close に移行できます。

- リリース 11.1.2.3
- リリース 11.1.2.4

Cloud EPM

Financial Management から EPM Standard Cloud Service または EPM Enterprise Cloud Service 環境にアプリケーションを移行できます。

Financial Management のメタデータおよびアーティファクトの移行

Cloud EPM 移行アクセラレータを使用して、Oracle Hyperion Financial Management のアーティファクトとデータを Financial Consolidation and Close に移行します。このツールとサポート・ドキュメントは、Oracle サポートで入手できます。

Cloud EPM 移行アクセラレータとドキュメントをダウンロードするには:

- ブラウザで [Oracle サポート](#) に移動してサインインします。
- ドキュメント 2420798.1 を検索します。検索機能はページの右上隅にあります。
「HFM から Cloud EPM への移行アクセラレータ(ドキュメント ID 2420798.1)」が表示されます。
- 「**ACTIONS**」で **Cloud EPM 移行アクセラレータ(ECMA)**リンクをクリックします。

4. 「パッチの詳細」で「ダウンロード」をクリックします。
5. 「ファイルのダウンロード」で `p28352563_111240_Generic.zip` をクリックし、これをローカル・ディレクトリに保存します。
6. 7-Zip などのサードパーティ製ユーティリティを使用して、`p28352563_111240_Generic.zip` のコンテンツを抽出します。
7. `p28352563_111240_Generic.zip` を抽出したディレクトリ内の「User Documentation」を開きます。
8. 次のドキュメントの説明を参照して、Financial Management のメタデータ、データおよびアーティファクトを移行します。
 - *Migrating to Cloud EPM from Hyperion Financial Management (HFM).pptx*: 移行プロセスの概要が示されています。
 - *Whitepaper - HFM to Cloud EPM - 18 08-V5.docx*: 手順を追った移行の説明が記載されています。
 - *EcmaUserGuide.docx*: Cloud EPM 移行アクセラレータの使用方法が説明されています。

Account Reconciliation への Financial Close Management の移行

- サポートされている移行パス
- [Financial Close Management](#) アーティファクトのエクスポート
- アーティファクトの [Account Reconciliation](#) へのアップロード
- アプリケーションの作成
- [Account Reconciliation](#) へのアーティファクトのインポート
- 検証とトラブルシューティング

サポートされている移行パス

[Account Reconciliation](#) に移行する Oracle Hyperion Financial Close Management インスタンスは、リリース 11.1.2.4.250 以降であることが必要です。

Financial Close Management アーティファクトのエクスポート

Oracle Hyperion Financial Close Management アーティファクトをオンプレミス・デプロイメントからエクスポートするには:

1. オンプレミス・デプロイメントで Shared Services 管理者としてログインします。
2. 「ナビゲート」、「管理」、「Shared Services Console」の順に選択します。
3. 左ペインで、「アプリケーション・グループ」、「Financial Close Management」、「Financial Close Management」の順に展開します。
4. 右側のパネルで「共通」を展開して、次のアーティファクトを選択します。
 - カレンダー
 - 通貨
 - 休日ルール

- 組織単位
- チーム
- オプションで、Account Reconciliation Manager に固有のレポート・グループ、レポート問合せおよびレポートを選択します。

ノート:

MSSQL データベースを使用しているオンプレミス環境からエクスポートする場合、レポート・オブジェクトは含めないでください。クラウド環境で使用されるのは Oracle データベースのみであるため、MSSQL のレポートは、Account Reconciliation では使用できません。レポート問合せはデータベースに固有です。

5. ルート・ノードである「**Reconciliation Manager**」を選択し、その下位にあるものすべてを選択します。
6. 「**エクスポート**」をクリックし、エクスポート・ファイルの名前を指定します。
7. エクスポートの完了を待機し、修正が必要なエラーがあるかどうかを確認します。
8. 「**ファイル・システム**」でエクスポートしたファイルを右クリックし、「**ダウンロード**」を選択します。その後、そのファイルをローカルに保存します。
エクスポートされたファイルを含む ZIP アーカイブが作成されます。このスナップショットを次のステップで Account Reconciliation にインポートします。

アーティファクトの Account Reconciliation へのアップロード

前のステップで、Oracle Hyperion Financial Close Management アーティファクトをエクスポートして、選択した場所にスナップショットを作成しました。このスナップショットを Account Reconciliation にアップロードします。

uploadFile EPM 自動化コマンドを使用して、Account Reconciliation 環境にスナップショットをアップロードします。次のコマンド・シーケンスを使用して、スナップショットをアップロードします。


```
epmautomate login example_admin example_password/password_file example_url
epmautomate uploadfile SNAPSHOT_NAME
```

「EPM 自動化」を実行したディレクトリにスナップショットがない場合は、必ず完全修飾パスを指定します。アップロード・プロセスが完了するのに数分かかることがあります。

移行を使用してアップロードすることもできます。[サービスへのアーカイブのアップロード](#)を参照してください。

アプリケーションの作成

Account Reconciliation アプリケーションを作成するには:

1. ブラウザから Account Reconciliation 環境にサービス管理者としてサインインします。
2. 「**開始**」をクリックします。
3.  (新規)をクリックします。

Account Reconciliation のホーム・ページが開きます。

Account Reconciliation へのアーティファクトのインポート

ノート:

インポートする際、Account Reconciliation 環境は、データやサンプル・アプリケーションがない状態にしておく必要があります。

Account Reconciliation 環境にアーティファクトをインポートするには:

1. ブラウザから Account Reconciliation 環境にサービス管理者としてサインインします。
2. 「ツール」、「移行」の順にクリックします。
3. 「スナップショット」をクリックします。

前にアップロードしたスナップショット(OnPremiseApplication など)が「スナップショット」に表示されます。インポートするアーティファクト間には相互依存性があるため、インポートは一連のステップで実行する必要があります。
4. スナップショットを展開してから、アプリケーション・リンクをクリックします。
5. 「共通」ノードを選択し、「インポート」をクリックします。
6. 「インポート」で「OK」をクリックします。

移行ステータス・レポートが表示されます。移行が完了するまでレポートをリフレッシュし、レビューします。
7. スナップショットで、「照合マネージャ」の下にあるすべての項目を選択します(ただし、次を除く)。
 - プロファイル
 - 照合
8. 「インポート」をクリックします。
9. 「インポート」で「OK」をクリックします。

移行ステータス・レポートが表示されます。移行が完了するまでレポートをリフレッシュし、レビューします。
10. スナップショットで、「照合マネージャ」の下にある次の項目を選択します。
 - プロファイル
 - 照合
11. 「インポート」をクリックします。
12. 「インポート」で「OK」をクリックします。

移行ステータス・レポートが表示されます。移行が完了するまでレポートをリフレッシュし、レビューします。

検証とトラブルシューティング

インポート中に移行ステータス・レポートをチェックして、Account Reconciliation 環境へのインポートにエラーが発生していないことを確認します。エラーが報告された場合は、修正処理を実行してからアーティファクトを再インポートします。

インポートが完了したら、Account Reconciliation にサインインし、データが正しく移行されたことを確認します。

- 期間が正しく設定されていることを確認します。
- 「ワークリスト」または「照合」を使用して特定の期間の照合を表示します。
- 照合をいくつか開き、割当と作業、履歴が正しいことを確認します。
- フォーマット、属性、組織、およびその他のオブジェクトがすべて正しく表示されることを確認します。
- ユーザーとしてサインインし、照合へのアクセス権が正しいことを確認します。

Profitability and Cost Management へのオンプレミスの Profitability and Cost Management の移行

- [サポートされている移行パス](#)
- [Profitability and Cost Management アーティファクトのエクスポート](#)
- [Profitability and Cost Management へのテンプレート・ファイルのアップロード](#)
- [Profitability and Cost Management へのテンプレート・ファイルのインポート](#)

サポートされている移行パス

Profitability and Cost Management へは、リリース 11.1.2.4.x の Oracle Hyperion Profitability and Cost Management インスタンスのみ移行できます。

オンプレミス Profitability and Cost Management は EPM Enterprise Cloud Service 環境にのみ移行できます。

Profitability and Cost Management アーティファクトのエクスポート

Profitability and Cost Management では管理元帳アプリケーションのみをサポートしています。

オンプレミス環境で、次のいずれかを使用して、Profitability and Cost Management にアップロードできるテンプレート・ファイルを作成します:

- 管理元帳の標準移行ユーティリティを使用して、Oracle Hyperion Profitability and Cost Management の標準 Profitability アプリケーションのアーティファクトをテンプレート・ファイルにエクスポートします。
手順については、[管理元帳の標準移行ユーティリティの使用](#)を参照してください。
- Profitability and Cost Management の「[テンプレートのエクスポート](#)」コマンドを使用し、Profitability and Cost Management にインポート可能な形式で管理元帳アプリケーションのパッケージを作成します。
手順については、「[テンプレートのエクスポート](#)」コマンドの使用を参照してください。

管理元帳の標準移行ユーティリティの使用

管理元帳の標準移行ユーティリティを使用して、詳細 **Profitability** アプリケーションを **Profitability and Cost Management** 環境に移行する準備を行います。

ノート:

このユーティリティは、**Oracle Database** を使用する **Oracle Hyperion Profitability and Cost Management** インストールに対してのみ使用できます。

このユーティリティにより、新しい管理元帳アプリケーションとして **Profitability and Cost Management** にインポート可能なテンプレート ZIP ファイルが作成されます。それには標準 **Profitability** アプリケーションのディメンション・メタデータ、視点(POV)定義、およびアプリケーションのプリファレンスが格納されます。また、標準アプリケーションのステージとルールから導出されたプレースホルダ付きの管理元帳ルール・セットとルールも含まれ、移行プロセスの実行に手動入力が必要とするフレームワークも用意されています。

管理元帳の標準移行ユーティリティでは、**PL/SQL** プロシージャを使用して標準 **Profitability** アプリケーションからサーバー上のファイルに情報を抽出します。**PL/SQL** プロシージャでは、最初に **Oracle directory** オブジェクトを作成し、このオブジェクトを使用してデータベース・サーバーのオペレーティング・システムにアクセスし、ファイルを書き込む必要があります。次に、これらのファイルを **Microsoft Windows** ベースのクライアント・コンピュータにコピーし、そのコンピュータ上でバッチ(BAT)ファイルを実行してファイルを準備し、管理元帳のテンプレート ZIP ファイルにパッケージ化します。最後に、テンプレート・ファイルをクラウド内の新しい管理元帳アプリケーションにインポートできます。

ステップは次のとおりです。

1. ユーティリティ・ファイルが格納された ZIP ファイルから、それらのファイルを抽出します。

P28048630_111240_Generic.zip パッチ・ファイルを開き、sptomlextract.sql と sptomltemplate.bat の 2 ファイルを抽出します

Zip ファイル内で、これらは次のフォルダに配置されます:

HPCM_11_1_2_4_128_28048630\files\products\Profitability\database\Common\Oracle

2. **Oracle directory** データベース・オブジェクトを作成して、移行ファイルが書き込まれるデータベース・サーバー上の場所を指定します:

- a. **Oracle SQL Developer** または **SQL Plus** で、create any directory 権限を持つユーザーに接続し、次のコマンドを実行します。

```
create or replace directory EXTRACT_DIR as '<移行ファイルの書き込み先のディレクトリ・パス>';
```

たとえば、**Windows** サーバーの D:\Migration_Extract ディレクトリに書き込む場合は、次のようにします。

```
create or replace directory EXTRACT_DIR as 'D:\Migration_Extract';
```

- b. 次のようにして、**Profitability and Cost Management** 製品のスキーマ所有者に、そのディレクトリでのすべての権限を付与します。

```
grant all on directory EXTRACT_DIR to <Profitability and Cost Management のスキーマ所有者>;
```

たとえば、**Profitability and Cost Management** のスキーマ所有者が HPCM1 の場合は、次のコマンドを使用します。

```
grant all on directory EXTRACT_DIR to HPCM1;
```

3. 移行ユーティリティの PL/SQL パッケージを作成するには:

Oracle SQL Developer または SQL Plus から、**Profitability and Cost Management** 製品のスキーマ所有者として `sptomlextract.sql` スクリプトを実行します。これにより、**HPM_SP_TO_ML_PKG** PL/SQL パッケージの作成とコンパイルが行われます。

4. 移行ユーティリティを実行して、標準 **Profitability** アプリケーションからデータベース・サーバー上のファイルに情報を抽出します。

次のコマンドを Oracle SQL Developer または SQL Plus から実行します。

```
exec HPM_SP_TO_ML_PKG.ExtractAll('<appName>');
```

たとえば、アプリケーション名 "BksSP82" の場合は、次のコマンドを使用します。

```
exec HPM_SP_TO_ML_PKG.ExtractAll('BksSP82');
```

ステップ2で指定したディレクトリに移行ファイルが作成されます。

5. 任意の Microsoft Windows クライアントまたはサーバーに移行ファイルをコピーします。

Oracle Database インスタンスが Microsoft Windows システムにインストールされていない場合は、生成された移行ファイルを任意の Windows システムにコピーします。`sptomltemplate.bat` ファイルもこの場所にコピーします。

6. 管理元帳テンプレートの ZIP ファイルを生成します。

Microsoft Windows コンピュータで、次のコマンドを使用して `sptomltemplate.bat` スクリプトを実行し、移行ファイルを準備して管理元帳のテンプレート ZIP ファイルにパッケージ化します。

```
sptomltemplate.bat <移行ファイルのコピー先のディレクトリ・パス>
```

たとえば、移行ファイルを Windows サーバーの `D:\Migration_Template` にコピーした場合、コマンドは次のようになります。

```
sptomltemplate.bat D:\Migration_Template
```

このステップでは、`SPToML_Template.zip` という名前のテンプレート・ファイルが同じフォルダ内に生成されます。

「テンプレートのエクスポート」コマンドの使用

Oracle Hyperion Profitability and Cost Management アプリケーションから **Profitability and Cost Management** への移行には、次のものが含まれます。

- ディメンション。Oracle Hyperion EPM Architect のファイルベースまたは管理対象ディメンション、あるいは Oracle Essbase キューブ
- ルールとルール・セット
- 問合せとモデル・ビュー
- POV 設定
- オプションの入力値、ただし計算済の値は除く

管理元帳アプリケーション以外のコンテンツは含まれません。たとえば、Financial Reporting を使用して生成されるレポートは含まれません。

「テンプレートのエクスポート」コマンドを使用してアーティファクトをエクスポートするには:

1. オンプレミス・デプロイメントで **Profitability and Cost Management** に管理者としてログインします。
2. 「アクション」、続いて「テンプレートのエクスポート」をクリックします。
3. 「テンプレートのエクスポート」で、「ファイル名のエクスポート」(例: OnPremises_ML_templates)を入力し、「**入力データを含める**」かどうかを指定します。
4. 「OK」をクリックしてエクスポートを開始します。進行状況は、「**ジョブ・ライブラリ**」で追跡できます。

Profitability and Cost Management へのテンプレート・ファイルのアップロード

uploadFile EPM 自動化コマンドを使用して、テンプレート(SPtoML_Template.zip)を Profitability and Cost Management 環境にアップロードします。

ファイル・エクスプローラを使用してテンプレートをアップロードおよびインポートすることもできます。*Profitability and Cost Management* の管理のファイル・エクスプローラでのファイルの転送を参照してください。

uploadfile コマンドを使用してファイルをアップロードするには:

1. Profitability and Cost Management 環境にサービス管理者としてサインインします。
epmautomate login example_admin example_password/password_file example_url
2. uploadFile コマンドを実行します。
epmautomate uploadfile OnPremises_ML_templates.zip profitinbox
epmautomate uploadfile "D:\Migration_Template\SPtoML_Template.zip" profitinbox
テンプレート・ファイルの場所を識別するには、[管理元帳の標準移行ユーティリティの使用](#)または「[テンプレートのエクスポート](#)」コマンドの使用を参照してください。
3. サインアウトします。
epmautomate logout

Profitability and Cost Management へのテンプレート・ファイルのインポート

Profitability アプリケーション・コンソールを使用して、アーカイブ(例: 前のステップでアップロードした OnPremises_ML_templates.zip)からテンプレートをインポートします。ファイル・エクスプローラを使用してテンプレートをアップロードおよびインポートすることもできます。*Profitability and Cost Management* の管理のファイル・エクスプローラでのファイルの転送を参照してください。

テンプレートをインポートするには:


1. ブラウザから Profitability and Cost Management 環境にサービス管理者としてサインインします。

2. 「アプリケーション」をクリックし、もう一度「アプリケーション」をクリックして Profitability アプリケーション・コンソールを開きます
3. 「アプリケーション」で、「+」(作成)をクリックし、「テンプレートのインポート」を選択します。
4. 「ファイルの選択」をクリックし、「サーバー」をファイルの保存場所として選択します。
ファイル・エクスプローラを使用してテンプレート・アーカイブをアップロードする場合は、「クライアント」を保存場所を選択します。
5. 参照してテンプレート・アーカイブ(例: OnPremises_ML_templates.zip)を選択します。
6. 「OK」をクリックします。

Enterprise Profitability and Cost Management へのオンプレミスの管理元帳アプリケーションの移行

Enterprise Profitability and Cost Management へは、リリース 11.1.2.4.x の管理元帳アプリケーションのみを移行できます。この移行には、次のステップが含まれます:

- Oracle Hyperion Profitability and Cost Management の「[テンプレートのエクスポート](#)」コマンドを使用して、Profitability and Cost Management にインポート可能な形式で管理元帳アプリケーションをパッケージ化します。手順については、「[テンプレートのエクスポート](#)」コマンドの使用を参照してください。
- クラウド移行テンプレートを使用して、前のステップからのパッケージを Profitability and Cost Management にアップロードし、Profitability and Cost Management アプリケーションを作成します。
- PCM から Enterprise Profitability and Cost Management への移行ユーティリティを使用して、アプリケーションを Profitability and Cost Management から Enterprise Profitability and Cost Management に移行します。

目的	視聴
Profitability and Cost Management から Enterprise Profitability and Cost Management への移行に関するビデオ・チュートリアルを視聴してください	 チュートリアル

Strategic Modeling への Strategic Finance の移行

オンプレミス Oracle Hyperion Strategic Finance のデータベースおよび連結は、そのままでは Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management に移行できません。個々のエンティティおよびテンプレートを移行する必要があります。その他の Strategic Finance アーティファクト(データ・マップ、エンティティ変更管理など)および仮定の変更管理ドキュメントは、Strategic Modeling で手動で再作成されます。

- [サポートされている移行パス](#)
- 移行のための [Strategic Finance](#) モデルおよびテンプレートの準備
- [Strategic Modeling](#) へのオフライン・モデルの移行
 - ブラウザを使用した [Strategic Modeling](#) へのオフライン [Strategic Finance](#) モデルの移行

- Smart View を使用した Strategic Modeling へのオフライン Strategic Finance モデルの移行
- Strategic Modeling への Strategic Finance テンプレートのインポート(オプション)
- Strategic Modeling での移行したモデルおよびテンプレートの有効化
- 連結階層の作成

サポートされている移行パス

Oracle Hyperion Strategic Finance のエンティティおよびテンプレートは、Strategic Finance リリース 11.1.2.4.002 のみから移行できます。

以前のバージョンの Strategic Finance を使用している場合は、エンティティおよびテンプレートが Strategic Modeling で使用するために変換可能なファイル形式になるために、オンプレミス・デプロイメントをリリース 11.1.2.4.002 にアップグレードします。

移行のための Strategic Finance モデルおよびテンプレートの準備

Oracle Hyperion Strategic Finance の各モデルおよびテンプレートは個別に移行します。Oracle Smart View for Office の「オフライン化」機能を使用すると、エンティティおよびテンプレートを Strategic Modeling に移行可能なローカル ALC ファイルとして簡単に保存できます。

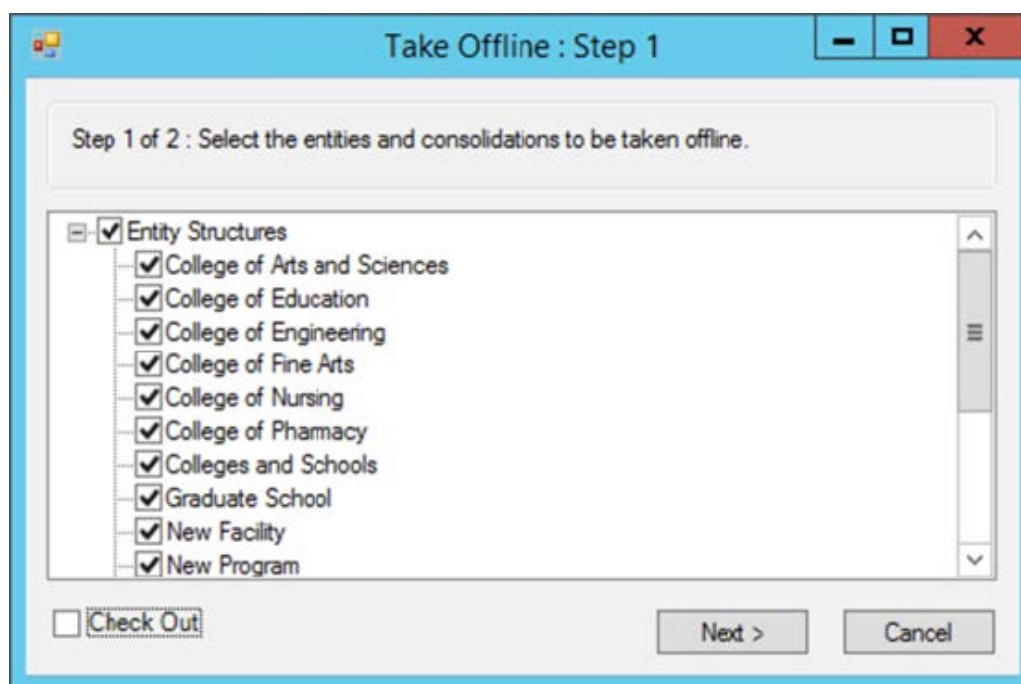
Strategic Finance でモデルを作成するのに使用したテンプレートのコピーを保持しない場合、テンプレート・ファイルを Strategic Modeling に移行する必要はありません。

次の手順を使用して、移行するエンティティごとに個別の ALC ファイルを作成します。ALC ファイルは、Strategic Finance がデプロイされているコンピュータの

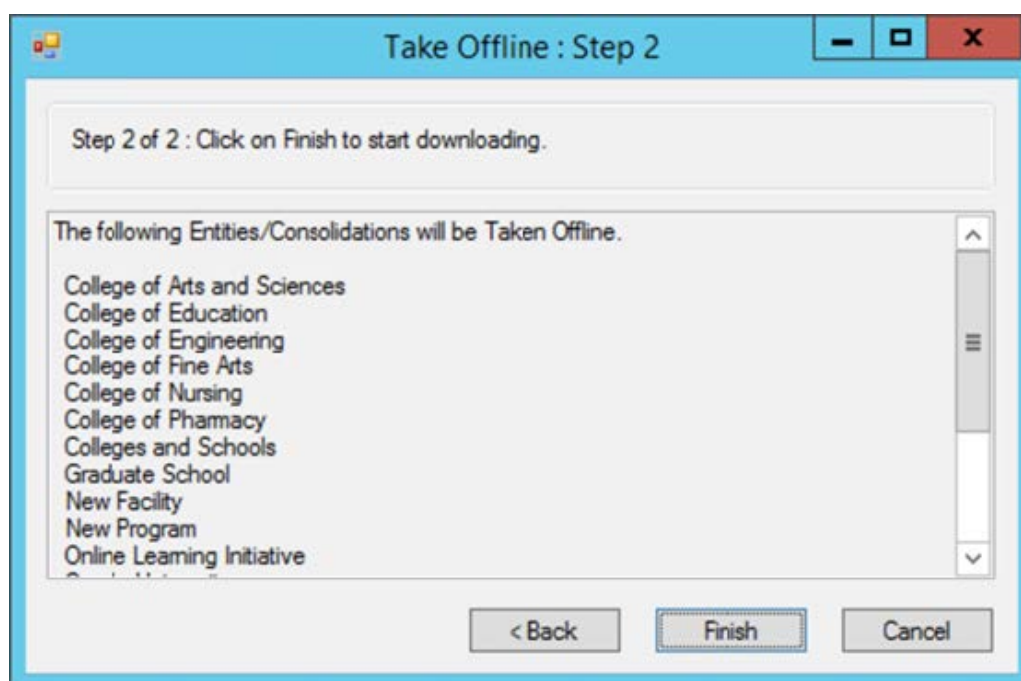
`EPM_ORACLE_HOME\products\hsf\Client\offline \server_hostname\database_name` ディレクトリ(通常は、Oracle\Middleware
`\EPMSysstem11R1\products\hsf\Client\offline\server_hostname\database_name`)に格納されます。

Smart View を使用してモデルおよびテンプレートをオフライン化するには:

1. Smart View から、エンティティおよびテンプレートの移行元になる Strategic Finance インスタンスに接続します。
2. Smart View で、「Strategic Finance」データベース・ノードを右クリックし、「**オフライン化**」を選択します。
「オフライン化」ユーティリティが表示されます。
3. 「オフライン化」ユーティリティで、次のステップを完了します:
 - a. オフライン化するモデルを選択します。
 - b. 「**チェックアウト**」チェック・ボックスが選択されていないことを確認します。
 - c. 「**次**」をクリックします。



- d. オフライン化されるモデルのリストを確認します。この画面にリストされるモデルおよびテンプレートは、ALC ファイルとして保存されます。
- e. 「終了」をクリックします。



4. プロセスが終了するまでしばらく待ちます。モデルをオフライン化するプロセスが完了とレポートされたら、「OK」をクリックします。

Cloud EPM での Planning モジュール・アプリケーションの作成および戦略モデリングの有効化

オフライン化した Oracle Hyperion Strategic Finance モデル(ALC ファイル)を使用して、Strategic Modeling にモデルを作成します。

モデルを作成する前に、Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management で Planning モジュール・アプリケーションを作成し、戦略モデリングを有効化する必要があります。*Planning* モジュールの管理で次の情報ソースを参照してください:

- アプリケーションの作成
- Strategic Modeling の有効化

Strategic Modeling へのオフライン・モデルの移行

Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management の画面または Oracle Smart View for Office を使用して、オフライン化した Oracle Hyperion Strategic Finance モデルに基づき戦略モデリング・モデルを作成できます。

モデルを移行するとき、すべてのモデル・アーティファクト(POV、レポートなど)は Strategic Modeling の新しいモデルに移行されます。

- [ブラウザを使用した Strategic Modeling へのオフライン Strategic Finance モデルの移行](#)
- [Smart View を使用した Strategic Modeling へのオフライン Strategic Finance モデルの移行](#)

ブラウザを使用した Strategic Modeling へのオフライン Strategic Finance モデルの移行

Strategic Modeling モデルの作成時に、オフラインの Oracle Hyperion Strategic Finance モデルをソースとして使用して移行します。

オフライン Strategic Finance モデルを移行するには:

1. サービス管理者として Strategic Modeling にアクセスします。
2. モデルを作成します。手順の詳細は、*Planning* モジュールの管理の戦略モデリング・モデルの作成を参照してください。

📌 ノート:

モデルを作成するときは、「**新規モデルの作成:一般**」で次を選択する必要があります:

- 「**モデルの作成元**」で、「**ローカル・ファイル**」を選択します。
- 「**ファイルの選択**」で、以前に準備した Strategic Finance モデル(ALC)ファイルの1つを選択します。

オフライン化する Strategic Finance モデル・ファイルのデフォルトの場所は、Strategic Finance がデプロイされているコンピュータの `EPM_ORACLE_HOME\products\hsf\Client\offline\server_hostname\database_name` ディレクトリ(通常は、Oracle \Middleware\EPMSystem11R1\products\hsf\Client\offline\server_hostname\database_name)です。

The screenshot shows the 'Create New Model: General' dialog box. At the top, there are navigation buttons: 'Back', 'Cancel', and 'Next'. Below these are progress indicators for 'General', 'Calendar', 'Time Period', 'Configure Years', and 'Review'. The main form contains the following fields and options:

- Model Name:** Migrated Higher Ed
- Description:** Higher Education Model migrated from Strategic Finance
- Create Model From:** Local File
- Select File:** sample_higher_ed.alc
- Keep Time Structure
- Keep Source Model Data
- Place at Root:**
- Parent Model:** (empty field)
- Currency:** USD United States of America Dollar
- Units:** Millions

3. モデルに関するその他の必須設定を入力します。

ソースとして使用される Strategic Finance モデルから時間構造およびソース・モデル・データを保持できます。ソース・モデル・データを使用しない場合は、別の通貨および通貨単位を選択できます。同様に、モデルをルート・モデルに配置してモデル階層を作成したり、「**ルートに配置**」チェック・ボックスの選択を解除して、このモデルを「**親モデル**」で選択した別のモデルの子として追加できます。

4. 「**次**」をクリックして、残りの画面に進み、追加設定を指定します。「**レビュー**」で、「**モデルの作成**」をクリックします。
5. 「**OK**」をクリックして、プロセスを完了します。
6. 移行するモデルごとに、ステップ 3 から 6 を繰り返します。

Smart View を使用した Strategic Modeling へのオフライン Strategic Finance モデルの移行

Oracle Smart View for Office を使用すると、オフライン Oracle Hyperion Strategic Finance モデルをソースとして使用して Strategic Modeling モデルを作成できます。

Strategic Modeling の Smart View 拡張機能を使用してオフライン Strategic Finance モデルを移行するには:

モデルを移行するとき、すべてのモデル・アーティファクト (POV、レポートなど) は Strategic Modeling の新しいモデルに移行されます。

1. Strategic Finance を使用して、戦略モデリングが有効な Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management 環境に接続します。
2. 「戦略モデリング」リボンの「Smart View」パネルで、「戦略モデリング」ノードを展開します。
3. 「モデル・ビュー」を右クリックして「新規モデル」を選択します。
4. モデルを作成します。Smart View での戦略モデリングの使用の別のモデルをコピーしてモデルを作成を参照してください。

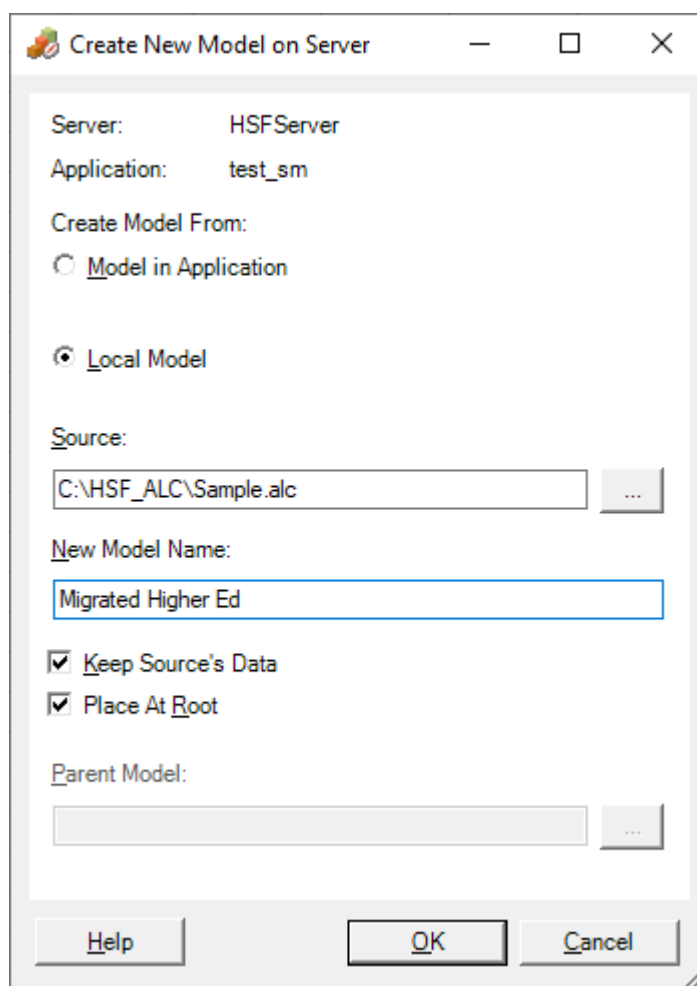
ノート:

モデルを作成するときは、「サーバーに新規モデルを作成」で次を選択する必要があります:

「ソース」で、以前に準備した Strategic Finance モデル(ALC)ファイルの1つを選択します。

オフライン化する Strategic Finance モデル・ファイルのデフォルトの場所は、Strategic Finance がデプロイされているコンピュータの
EPM_ORACLE_HOME\products\hsf\Client\offline\server_hostname\database_name ディレクトリ (通常は、
Oracle\Middleware\EPMSysstem11R1\products\hsf\Client\offline\server_hostname\database_name) です。


ソースとして使用されるオフライン Strategic Finance モデルからソース・モデル・データを保持できます。ソース・モデル・データを使用しない場合は、後で別の通貨および通貨単位を選択できます。同様に、モデルをルート・モデルに配置してモデル階層を作成したり、「ルートに配置」チェック・ボックスの選択を解除して、このモデルを「親モデル」で選択した既存のモデルの子として追加できます。



5. 「OK」をクリックします。
6. 移行するモデルごとに、ステップ 3 から 5 を繰り返します。

Strategic Modeling への Strategic Finance テンプレートのインポート(オプション)

Oracle Smart View for Office を使用して、Oracle Hyperion Strategic Finance テンプレートを Strategic Modeling にインポートします。このステップは、移行したモデルを作成するのに使用したテンプレートを保持する場合のみ必要です。

 ノート:

Strategic Finance モデルをオフライン化すると、モデルの作成に使用されたテンプレート(サーバー上で使用可能な場合)は、**Strategic Finance** がデプロイされているコンピュータの
`EPM_ORACLE_HOME\products\hsf\Client\offline\server_hostname\database_name`
 ディレクトリ(通常は、
`Oracle\Middleware\EPMSys11R1\products\hsf\Client\offline\server_hostname\database_name`)にコピーされます。テンプレート・ファイルは、**ALT** ファイルとして作成されます。

Smart View を使用してテンプレートをインポートするには:

1. **Strategic Finance** を使用して、戦略モデリングが有効な Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management 環境に接続します。
2. 「戦略モデリング」リボンの「Smart View」パネルで、「戦略モデリング」ノードを展開します
3. 「テンプレート」を右クリックし、「テンプレートのインポート」を選択します。
4. 「ソース・テンプレート」で、インポートするテンプレート・ファイルを選択します。
5. 「テンプレート名」に、Strategic Modeling で一意のテンプレート名を入力します。
6. 「OK」をクリックします。
7. 移行するテンプレートごとに、このプロセスを繰り返します。

Strategic Modeling での移行したモデルおよびテンプレートの有効化

Strategic Modeling で移行したモデル、そのレポートおよびテンプレートを有効化するプロセスには、移行したモデルおよびテンプレートからチェック・アウトしてチェック・インする操作が含まれます。Strategic Modeling の Oracle Smart View for Office 拡張機能を使用して、このプロセスを完了します。

モデルにチェック・アウトおよびチェック・インするには:



1. Smart View の Oracle Hyperion Strategic Finance 拡張機能を使用して、戦略モデリングが有効な Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management 環境に接続します
2. 「戦略モデリング」リボンの「Smart View」パネルで、「戦略モデリング」ノードを展開します。
3. 次のステップを実行します:
 - a. モデルからチェック・アウトするには、「モデル・ビュー」ノードを展開します。
 - b. テンプレートからチェック・アウトするには、「テンプレート」ノードを展開します。
4. チェック・アウトするモデルまたはテンプレートを右クリックし、「開く - チェック・アウト」を選択します。
 モデルまたはテンプレートのチェック・アウトされたビューが表示されます。
5. 「戦略モデリング」リボンで、「閉じる」をクリックします
 「モデルを閉じる」画面が表示されます。
6. 「モデルを閉じる」で、クローズ・オプションとして「チェックイン」を選択し、「OK」をクリックします。

7. 有効化するモデルまたはテンプレートごとにステップ 3 から 6 を繰り返します。

連結階層の作成

Strategic Modeling の連結階層は組織の構造を表します。連結には多数のモデルを含めることができるため、モデルのみからのデータは連結したモデルに含まれます。連結によって、変化する事業部門の状況が、会社の収益にどのような影響を与えるかを判断できるため、事業部門について、情報に基づいた意思決定を行えます。

手順の詳細は、*Planning* モジュールの操作の連結の作成および実行を参照してください。連結階層を作成するには:

1. サービス管理者として **Strategic Modeling** にアクセスします。
2. 「**連結ビュー**」、「**追加**」の順にクリックします。
3. 連結の名前を入力し、 (OK) をクリックします。
4. 新しい連結の名前をクリックして開きます。
5.  (追加) をクリックして、連結に追加できる既存のすべてのモデルをリストします。
6. 連結にモデルをドラッグ・アンド・ドロップします。
7. 完了したら「閉じる」をクリックします。

Data Relationship Management から Oracle Enterprise Data Management Cloud への移行

データ階層を Oracle Data Relationship Management から Oracle Fusion Cloud Enterprise Data Management に移行してからデータ管理を実行して、クラウド内のエンタープライズ・データの進行中のメンテナンスを促進します。

Oracle Enterprise Data Management Cloud は、最新のクラウドベース・ソリューションであり、俊敏で増分的な、目的にかなった一意のアプローチを利用して、エンタープライズ全体の個人、チーム、部門およびエンティティ間でのエンタープライズ・データのきめ細かなデータ共有を促進します。

幅広い移行ステップには次のものが含まれます:

- Data Relationship Management 内の各階層のエクスポート・ファイルの作成
- Data Relationship Management のディメンションでの Oracle Enterprise Data Management Cloud 内のアプリケーションの登録
- Data Relationship Management のエクスポート・ファイルを使用した、Oracle Enterprise Data Management Cloud に登録されているアプリケーションへのディメンションのインポート
- アプリケーション・ビューを使用したエンタープライズ・データ・メンテナンスの開始またはエンタープライズ・データをドメイン別に整理するためのメンテナンス・ビューの作成

手順の詳細は、*Oracle Enterprise Data Management Cloud* の管理および操作の Data Relationship Management から Oracle Enterprise Data Management Cloud へのエンタープライズ・データの移行を参照してください。

FDMEE ベースのアプリケーションの移行に関する考慮事項

次の Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition ベースのアプリケーションは、オンプレミスから Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management に移行できます:

- Planning
- Oracle Hyperion Profitability and Cost Management

次のアーティファクトは、これらの機能が Cloud EPM でサポートされていないため移行できません:

- イベント・スクリプト、インポート・スクリプト、カスタム・スクリプトなどの任意のタイプのスクリプト
- カスタム・レポート

Planning などのオンプレミス・アプリケーションと Profitability and Cost Management では、Financial Data Quality Management, Enterprise Edition を使用したメタデータとデータのロードがサポートされます。Cloud EPM にアプリケーションを移行した後、データを統合するための次の2つのオプションがあります:

- ハイブリッド統合および Cloud EPM へのデータ・ロードを利用して、オンプレミスの FDMEE デプロイメントの使用を継続します。
- ソース・データ・システムへの直接接続を使用するすべての統合を、Data Management を使用したファイルベースの統合に変換します。直接統合をファイルベース統合に変換するには、次の操作を行う必要があります:
 - ソース・システムから区切りデータ・ファイルにデータをエクスポートするカスタム・データ抽出プロセスを開発します
 - データ管理を使用して、区切りデータ・ファイルをマップし、Cloud EPM アプリケーションにロードします

データ統合の管理のファイルベース統合の作成を参照してください。

次の「EPM 自動化」コマンド・シーケンスを使用して、データ・ファイルのアップロードと統合の実行のプロセスを自動化できます:

```
epmautomate login example_admin example_password/password_file example_url
epmautomate uploadfile DELIMITED_FILE_NAME.txt inbox/repository
epmautomate rundatarule AccountActual Mar-15 Jun-15 REPLACE STORE_DATA
inbox/AccountActual.dat
epmautomate logout
```

サンプル・コマンドの使用法と例は、EPM 自動化の操作の uploadFile 「EPM 自動化」コマンドを参照してください。

A

Cloud EPM への移行のための役割マッピング

事前定義済のアイデンティティ・ドメイン役割では、複数のオンプレミス役割が統合されます。適切なレベルのアクセス権が移行後に保持されるようにするには、オンプレミス・アプリケーションでユーザーに付与されたアクセス権をすべて含む事前定義済役割を付与します。

役割マッピングについて

たとえば、ユーザー `jdoe` が次のようなオンプレミス役割を持つと想定します。

- 移行中の **Planning** アプリケーションの対話型ユーザーの役割
- LCM 管理者(Shared Services)
- レポート・デザイナー(Reporting and Analysis)

これらの役割の中で、対話型ユーザーおよびレポート・デザイナーが **Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management** の「パワー・ユーザー」役割にマップされます。ただし、LCM 管理者の役割は「サービス管理者」事前定義済役割にマップされるため、それを `jdoe` に割り当てる必要があります。

- [Planning](#)
- [Financial Management](#)
- [Financial Close Management](#)
- [Profitability and Cost Management](#) および [Enterprise Profitability and Cost Management](#)
- [Data Relationship Management](#)

Planning

ユーザーが、次の表にリストされた役割とは異なるオンプレミス **Planning** の役割を持っている場合は、そのユーザーを「サービス管理者」事前定義済役割に割り当てる必要があります。

ノート:

Reporting and Analysis は、リリース **11.1.2.4.900** で **Document Repository** に変更されました。

表 A-1 Planning から Planning への役割マッピング

ユーザーに以下のオンプレミス役割しかない場合	ユーザーを割り当てる事前定義済のアイデンティティ・ドメイン役割
<p>Planning</p> <ul style="list-style-type: none"> アドホック・グリッド作成者 承認所有権割当て者 承認スーパーバイザ 対話型ユーザー タスク・リスト・アクセス・マネージャ <p>Reporting and Analysis</p> <ul style="list-style-type: none"> コンテンツ・マネージャ スケジュール・マネージャ <p>Document Repository (リリース 11.1.2.4.900 のみ)</p> <ul style="list-style-type: none"> 参照者 レポート・デザイナー・スケジューラ セキュリティ管理者 <p>Financial Data Quality Management.</p> <ul style="list-style-type: none"> 統合の作成 ドリル・スルー GL 書戻し 統合の実行 <p>Essbase Analytic Services 読取り</p>	<p>パワー・ユーザー</p>
<p>Planning</p> <ul style="list-style-type: none"> アド・ホック・ユーザー プランナ <p>Reporting and Analysis コンテンツ・パブリッシャ</p> <p>Document Repository (リリース 11.1.2.4.900 のみ)</p> <ul style="list-style-type: none"> レポート・デザイナー・スケジューラ 参照者 <p>Financial Data Quality Management ドリル・スルー</p>	<p>ユーザー</p>
<p>Planning ユーザーの表示</p> <p>Reporting and Analysis</p> <ul style="list-style-type: none"> エクスペローラ 参照者 <p>Document Repository ビューア</p>	<p>参照者</p>

Financial Management

Oracle Hyperion Financial Management のアプリケーション管理者およびシステムのロード役割を持つユーザーは、「サービス管理者」事前定義済役割に割り当てられる必要があります。

表 A-2 Financial Management から Financial Consolidation and Close への役割マッピング

ユーザーに以下のオンプレミス Financial Management の役割しかない場合	ユーザーを割り当てる事前定義済のアイデンティティ・ドメイン役割
内部取引管理 ルール管理者 ルール・デザイナー 仕訳の承認 仕訳の作成 貸借不一致の仕訳の作成 デフォルト 仕訳管理者 仕訳の転記 テンプレートの管理 繰返しの生成 確認監督者 確認者 1 から 10 送信者 データのロック データのロック解除 すべてを連結 連結 データのあるものすべてを連結 配賦の実行 エクイティ・ピック・アップの実行 データ入力フォームの管理 モデルの管理 サーバーでのシステム・レポートの保存 Excel データのロード 内部取引ユーザー 内部取引照合テンプレート 勘定科目による内部取引の自動照合 ID による内部取引の自動照合 許容差のある内部取引の自動照合 内部取引の手動照合 内部取引の不一致 内部取引の転記/転記の戻し Web グリッドでの書戻しの使用可能 データベース管理 出資比率の管理 カスタム・ドキュメントの管理 拡張分析 Excel から書き戻すデータ・フォーム	パワー・ユーザー

表 A-3 (続き) Financial Close Management から Account Reconciliation への役割マッピング

ユーザーに以下のオンプレミス役割しかない場合	ユーザーを割り当てる事前定義済のアイデンティティ・ドメイン役割
Financial Close Management <ul style="list-style-type: none"> Reconciliation 策定者 Reconciliation レビュー担当者 Reconciliation コメント者 Reconciliation 参照者 	ユーザー
Financial Data Quality Management ドリル・スルー	
Financial Close Management Reconciliation 参照者	参照者
Reporting and Analysis <ul style="list-style-type: none"> 参照者 エクスペローラ 	
Financial Data Quality Management ドリル・スルー	

Profitability and Cost Management および Enterprise Profitability and Cost Management

ユーザーが、次の表にリストされた役割とは異なるオンプレミス Profitability and Cost Management の役割を持っている場合は、そのユーザーを「サービス管理者」事前定義済役割に割り当てる必要があります。

表 A-4 Profitability and Cost Management から Profitability and Cost Management への役割マッピング

ユーザーに以下のオンプレミス役割しかない場合	ユーザーを割り当てる事前定義済のアイデンティティ・ドメイン役割
Profitability and Cost Management パワー・ユーザー	パワー・ユーザー
Reporting and Analysis	
<ul style="list-style-type: none"> アナリスト エクスプローラ レポート・デザイナー スケジュール・マネージャ 	
Document Repository (リリース 11.1.2.4.900 のみ)	
<ul style="list-style-type: none"> 参照者 レポート・デザイナー・スケジューラ セキュリティ管理者 	
Financial Data Quality Management.	
<ul style="list-style-type: none"> ドリル・スルー 統合の作成 統合の実行 GL 書戻し 	
Essbase Analytic Services 役割	
<ul style="list-style-type: none"> アプリケーションの開始/停止 データベース・マネージャ 	
Profitability and Cost Management 対話型ユーザー	ユーザー
Financial Data Quality Management ドリル・スルー	
Reporting and Analysis コンテンツ・マネージャ	
Document Repository 役割(リリース 11.1.2.4.900 のみ)	
<ul style="list-style-type: none"> レポート・デザイナー・スケジューラ 参照者 	
Essbase Analytic Services フィルタ	
Profitability and Cost Management ユーザーの表示	参照者
Document Repository (リリース 11.1.2.4.900 のみ): 参照者	
Reporting and Analysis:	
<ul style="list-style-type: none"> 参照者 エクスプローラ 	
Essbase Analytic Services フィルタ	

Data Relationship Management

これらのオンプレミスの役割は、Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management に適用できず、事前定義済役割にマップしないでください

- 分析ユーザー

- 匿名ユーザー
- ガバナンス・マネージャ
- ワークフロー・ユーザー

表 A-5 Data Relationship Management から Oracle Enterprise Data Management Cloud への役割マッピング

ユーザーがこれらの Oracle Data Relationship Management 役割しか持たない場合	ユーザーを割り当てる事前定義済のアイデンティティ・ドメイン役割
<ul style="list-style-type: none"> • アクセス・マネージャ • プロビジョニング・マネージャ • アプリケーション管理者 • LCM 管理者 	サービス管理者
<ul style="list-style-type: none"> • データ作成者 • データ・マネージャ • ガバナンス・ユーザー • 対話型ユーザー 	ユーザー